

版出月四年五社治明



211X-29

71
2
121

人
物
管
見



有 所 權 版

欽定四庫全書
欽定四庫全書

欽定四庫全書
欽定四庫全書

1162

人の知らざる可らざるは、人間と世間となり。人の知

らんと欲し、遠く知る能はざるは亦た人間と世間

となり。東坡詩あり曰く、横看成嶺側成峰、遠近高低

各不同、不識廬山真面目、只緣身在此山中と。只た

身此の山中に在り、是れ知る能はざる所以、而して知

らざる可らざる所以も亦た此に存す。

然らば則ち如何にして知るを得む。世間暫らく措く。

人間に於ては、之を知るの道他なし、孔丘曰はすや、

視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋

哉と。吾人竊に以て知言と爲す。

人間は、總ての機關中、最も複雑なる機關なり、而して其中には亦た靈妙不可思議の神機あり、獨り傍人の之を觀破するを許さざるのみならず、彼れ自身と雖、亦た測り知る能はざるものあり。然るに區々たる繩墨の見を以て、之を臆斷するか如き、天下の英雄を泣かしめざるものそれ幾何かある。彼等或は笑て絞頭臺に上らむ、然れども彼等は迂儒陋生か淺膚、杜撰の論定——其の酷評にも、其の諛言にも——甘服す

る能はざる可し。毀譽は英雄の關する所にあらず、所謂余か半面の黒子をも併せ描けば、磊落漢か呼號する所、彼等豈に「馬鹿大名」の如く、頌諛に汲々ならむや。彼等は只た知られんと欲するのみ。人間は一個の小宇宙あり、若し宇宙經濟に於て撞着の勢力、活動と反動あるを見ば、其の模型より打ち出したる人間に於て亦た其の然るを期せざる可らず。而して迂儒或は之を察せず、其の一端を採りて直ちに速了し去り、其の速了に應ずる性格を擧げて真と

ふし、實となし、其の反する性格を斥けて偽となし、
 矯となし、或は英雄人を瞞すとなす。解剖愈精にして
 其の眞面目を去る増々遠く、揣摩漸く深くして、其の
 特色を距つる倍々遙かに。恰も拙工か肖像を描き、其
 の彩色を塗抹する多くして、傳神を失ふと更らに甚
 たしきか如く。空しく英雄をして無告の大痛恨を吞
 ましむるは、抑も何の心ぞや。

人間を知るは容易にあらず、然れども亦た知らざる
 可らず、如何にして知る、孔丘の訓言に據りて之を知

るを得可し、如何にして孔丘の訓言に據るを得むや。
 直覺の心意、精到深射の眼識、寛裕同感の胸懷、及ひ
 謹嚴周匝ある事實の撝拾、濶大包括なる四圍の觀察
 の如きは、最も必要ある資格に相違なき也。然れども
 此の資格を具備したる論評家果して幾人かある、獨
 り此の資格に於て闕如たるのみならず、動もすれば
 執一の法を以て、錯雜ある人間を律し、既成の偏見に
 據りて、靈變の人心を斷し、之に加るに愛憎を以てし、
 甚しきは同感と反感とを以て唯一の標準となすに到

る、嗟呼人物論評の恃むに足らざる此に於て極る。
然りと雖亦た禁す可らざるものあり、ビーコンスッピ
ルド伯嘗て其の晩年の著「エンデミオン」に於て語り
て曰く、大凡公生涯に於ては、世事掌握の大局に當る
人物と親しく相識る程、緊要なるはあらず、世間萬事
總て彼等か其の品性、其の思想の風、其の偏僻、其の
迷信、其の瑣少の弱點、及其の健康の如何に關するも
のなりと。豈に唯た公生涯のみあらむや、世を知らん
と欲せば、人を知れ、人を知らんと欲せば、其の重な

る人を知れ。其の重なる人を知らんと欲せば、其の
特色を觀よ。而して特色を觀んと欲せば、勢ひ人物の
論評に據らざる可らず。

吾人豈に敢て自から其の特色を知ると云はんや、唯
た知らんと欲するの眞情に至りては、聊か人後に落
ちざるを期す。此書題して人物管見と云ふは、則ち此
か爲め也。惟ふに我邦に於て人物論評の道未だ大に
開けず、此か爲めに人物各其の所を得ず、社會經濟の
調和を失ふ蓋し鮮しとせず、是れ吾人が敢て自から

搦らす蜉蝣撼大樹の擧を試みたる所以也。若し此書にして五百金の馬骨たるを得ば、吾人の志酬ひたりと云ふ可し、豈に敢て多きを望まん哉。

明治廿五年四月廿日

國民之友記者

國民叢書第二冊
人 物 目 録 見

- 明治の二先生福澤諭吉君
新島襄君(明治廿一年三月國民之友第一七號)一頁
- 三島通庸君……………(同廿一年十一月同第三三號)一六頁
- 森有禮君……………(同廿二年二月同四十二號)二三頁
- 板垣退助君政治家の徳義……………(同廿二年四月同第四七號)三八頁
- 政海の三隱居大隈、伊藤
井上三伯……………(同廿三年一月同第七〇號)五〇頁
- 明治年間一種の人物島尾子爵(同廿三年四月同第七九號)六三頁
- 新島先生没後の同志社……………(同廿三年四月同第七九號)七五頁
- 「文字之教」を読む文學者として
の福澤諭吉君……………(同廿三年四月同第八〇號)八九頁
- 山縣伯に與ふるの書……………(同廿三年六月同第八六號)一〇〇頁
- 徳川武士の典型沼間守一君……………(同廿三年七月同第七八號)一〇三頁
- 矢野文雄氏……………(同廿三年八月同第九〇號)一〇五頁
- 元田東野翁……………(同廿四年二月同第一〇九號)一六五頁
- 板垣伯に與ふるの書……………(同廿四年四月同第一一四號)一八五頁
- 君子國の眞君子中村敬字翁……………(同廿四年六月同第一二二號)二〇七頁

國民叢書二冊 人物簡見

新日本の先生

福澤諭吉君と新島襄君



君子有_三樂、而王_三天下、不_三與存、
 父母_三在、兄弟_三無_レ故、一樂也、仰不_レ愧_三於天、俯不_レ怍_三於人、
 樂也、得_三天下_三英才_三而教_三育之、三樂也、君子有_三樂、而王_三天下、不_三與存、
 與存_三英才_三而人生_三の快樂固より少きに非ず、然れども天下の英才を得
 て、之れを教育するの樂みに優さる者果して幾許かある。我か維新
 以來教育家を以て自から任するもの甚た少しとせず、或は開發主義と
 謂ひ、或は注入主義と謂ひ、或は支那流義の道德を以て明治の青年を

Can you paint, or
 make, or think
 nothing but man.

EMERSON.

山高水長
二個の先生あり

檢束せんとする者あれば、或は又躰育を専らとし、歩兵操練を以て教育の主眼と爲す者もあり。滔々たる天下の教育家箒にて掃き樹にて量るに違まならずと雖も、所謂天下の英才を得て之れを教育し、山高水長く、感化を天下に及ぼす者果して焉くにある。吾人は今指を屈して二個の先生を得たり、一を福澤諭吉君と謂ひ、他を新島襄君と謂ふ。

吾人は今日に於てボスウエルがジョンソンに於けるが如く二君の人物、儀容、品行、性情等をは、顯微鏡的の眼光を以て之れを觀察し、其の一顰一笑に至る迄之れを摸寫して、以て二君を後世の紀念に傳ふるが如き業を爲さるべし。勿論斯の如き事を爲すは、他日其人あるべきを信す。然れども二君を教育家として觀察し、二君が教育世界に於けるの位地と、感化とを觀察して、之れを天下に告白するは、敢て

論點二
曰く其

位置、
其感化

僭越の業に非ざるへし。

蓋し我か邦教育の事業は、政府の手に依つて成就したる者多きや、抑も又人民の手に依つて成就したる者多きや、何人も其の皮相よりすれば、政府のお蔭なりと謂はぬ者はあらざるべし。仰いて帝國大學赤煉瓦の天に聳ゆるを觀、俯して教育博物館、圖書館等の費を並べて立つを觀れば、政府が教育世界に爲したる事業の甚た少きに非ざるを察すべし。然り政府は、實に教育に於て多少の功無きに非ず、即ち日本の教育の幾分は文部省の手によりて成就し、日本人才の幾分は、帝國大學が之れを養成したるとは、吾人が外山正一氏と共に承認せんと欲する所なり。素より帝國大學は、利巧なる秘書官を出せり、熟練なる技術家を出せり、錚々たる代言人を出せり。鐵道も、電信も、裁判も、吏務も、帝國大學の恩惠を受たると甚少なからざるは、吾人が外山正

利巧なる秘書官、
熟練なる技術家、
多能なる代官あり

一氏と共に承認する所なり。然りと雖も政府と民間とは何れか教育世
界に於て感化の勢力を有したりや、更に之れを再言すれば、政府と民
間とは何れか多く日本青年の氣風、性質、品行等にて其感化を及ぼし、併
て明治社會を包藏する大氣に其感化を及ぼしたるや、疑問茲に至れば、
吾人は猶豫なく民間の力政府に優れると萬々なるを斷せんと欲す。而
して此民間の力とは抑も誰れの力そや、概して論すれば吾人は猶豫な
く福澤諭吉君と、新島襄君との二君こそ即ち其人なりと謂はむ。

蓋し福澤君の教育上に於ける事業は、既に芽を發し花を開き實を結べ
り、新島君の事業に至つては、僅かに芽を發したる迄なり。故に福澤
君の事業を論する時には、吾人は歴史家の資格となり、新島君の事業
を論する時には、吾人は預言者の位地に立たざる可からず。斯の如く
二君の事業は、其前後する所あれども、吾人は二君を以て我が邦教育

世界○の○重○なる○感○化○力○と○謂○は○す○ん○は○あ○ら○す○。○何○と○な○れ○ば○二○君○は○實○に○明○治○
年○間○教○育○の○二○大○主○義○を○代○表○す○る○人○な○れ○ば○な○り○。○即○ち○物○質○的○知○識○の○教○育○
は、○福○澤○君○に○依○つ○て○代○表○せ○ら○れ、○精○神○的○道○徳○の○教○育○は、○新○島○君○に○依○つ○
て○代○表○せ○ら○る○。

吾人が所謂る物質的知識の教育、精神的道德の教育なる者は、極めて
普通にして濶大なる意味を含蓄する者なり。智識とは、唯科學の智識
を指すに非ず、總へて第十九世紀物質上の進歩より生し來る、鐵道、電
信、蒸氣、火藥、印刷等の新運動力より生し來る智識上の大氣を稱す
る者にして、云はゞ文明流の「コンモンセンス」と稱するも可ならん。
道德とは、敢て宗教の教育を指すに非ず、即ち宗教上の主義を實際
の人事に應用したる精神上の大氣是れなり。福澤君は鐵道の技術師に
も非ず、電氣學者にも非ず、而して君が常に鐵道電信と云々して、口

に絶たざる所以の者は、鎮道電信を愛するに非ず、鎮道電信に依つて成就したる物質上の文明を愛するものなり。新島君は純乎たる僧侶に非ず、而して其基督教を主張して止まざる者は、啻に基督教の傳播を欲するに非ず、基督教の主義を人事に適用せんと欲すればなり。是れに由つて知るべし、二君は實に泰西文明の二大原素を我か邦に輸入せんとするの案内者にして、泰西表面の文明たる物質的の智識は、福澤君に依つて案内せられ、泰西裏面の文明たる精神的の道德は新島君に於て案内せらる。而して前者は既に福澤君の案内に依つて我か邦に來れり。後者は新島君の案内に依つて將に來らんとす。

人或は福澤君の教育を以て、無主義の教育と爲す者あり然れども其無主義の如く見ゆるは、則ち最も其主義の一貫したるを證すべし。勿論君が二十年間唱道したる所の議論をば、其著述したる所のものに就て、

即ち西洋事情、學問の勧め、文明論の概略、分權論、民情一新、時事小言、近くは時事新報の社説に至る迄、細に之れを點檢したらば、隨分自家撞着も多かるべし。然りと雖も自家撞着の議論君に於て何かあらん。何となれば君が唱道する所の者は、皆時世に應じて立てたる議論なればなり。即ち能く世と推し移り、物に凝滞せざるは、君が本領にして、君が感化を天下に及ぼしたるは亦た此に存す。蓋し「コンモンセンス」の主義たる素より斯の如くならざる可からず。

去ればこそ君が教育の下に生長したる仲間、概して之を評すれば、伶俐にして活潑に、臨機應變の作用に富み、時勢に應じ變化し易く、事物に接し通用し易く、冷澹にして物に泥まず、事物の外に超然として事物を制するが如き人多きに居る。勿論之れが爲めに教育の流弊を醸し來るは自然の勢にして敢て深く君を咎む可きに非ず。要するに君

の教育を受けたる者は、文明流の「コンモンセンス」に得業し、浮世を渡る游泳術に成熟したるもの多きを知るべし。去れば凡そ我が邦物質世界に於て、新智識を要するの社會に於ては、君の感化行届かざる所なく、官省より會社、銀行、學校、新聞に至る迄、即ち人力車の通する處、川蒸氣船の達する處、ランプの光る處、ゴールデン烟草の薫る處、一として感化の及ばざる處なし。君の勢力も亦大いなりと謂ふべし。然りと雖も君は決して時勢に後れて時と推し移るに非ず、時勢に先たつて推し移るなり。是れ所謂る君か明治の社會に超然獨歩する所以にして、君か獨得の技倆亦た此に在り。時勢の將さに變せんとするや、君先づ之れを觀る。吾人は君の眼孔の果して千里の遠きを照らす夜光の珠なるや否やを知らず、然れども世人か恒に陥み迷ふ一寸先の足場は、君實に之を觀る、其の炯眼なる恰も梟鳥の暗中に物を觀るか如し。

時勢の將さに變せんとするや、君先づ之れを感ず。而して君の論する所恰も之れと相應するは、蟋蟀の秋に先たつて秋を報するが如く、黃鳥の春に先たつて春を報するが如し、而して常に之を報して止まず。且つ其報するや、歌ふか如く、笑ふか如く、語るか如く、教るか如く、誘ふか如く、勵すか如く、天下の人心をして鼓舞顛倒自から禁する能はざらしむ。蓋し君の明治世界に於ける感化の大なるは他に比す可きものなし。若し之ありとせばそれ唯た第十八世の下半に於て佛國の人心を支配したる、ゾオルテール其人あるのみ。然りと雖も、君の事物を觀察するや、恒に其中央の點に於てせずして、多くは兩端に於てす。中央の道は最も確なる道なりとハンブデンが服膺したる金言は、君に於て甚た迂濶なりとするの道にして、君の銳眼は恒に、中央の正面に反射せずして、兩端の側面に反射するが故に、

其の議論奇警非凡、往々人をして其意外に驚かしめ、人の爽快なる驚喜を促して止まずと雖も、之れが爲めに其結果は君が思ひ及ばざる所に迄、君が議論の影響を來し、所謂る曲れるを矯めて直きに過るの憂ひは往々にして之れ有るが如し。是れ畢竟君が感化の甚た大なるが故に斯の如しと雖も、之れが爲めに君の議論と君の本意と往々齟齬するところあるは、吾人が聊か君の爲めに歎息する所なり。

然りと雖も又君に向て敬服すべき者甚た少しとせず。何人と雖も其勢力を有するとは容易なれども、其勢力を誤用せざることは甚た難し、クロンウエルは鐵騎を有せり、然れども之れが爲めに心ならずも兵隊政治を行へり、西郷隆盛は私學校を有せり、然れども之が爲めに心ならずも十年内亂の總大將となれり。又現今に於て世の所謂る壯士輩の主領と仰かるゝ人々無きに非ず、然れども其の力は能く壯士をして平

和、穩當、正大の舉動を爲す能はしめざるは何そや。職として彼等が率ゆる所の者を能く支配する能はざるに依る。獨り福澤君に至つば然らず。君が直接間接の教育を受けたる者は、幾千人あるを知らず、然れども未だ一人の國事犯罪人となる者無く、爆裂彈を抱ひて強盜する者無く、皆社會に立つて、現今の所謂る中等社會に立つて、各其處世の道を誤る者無きは、實に君の力も亦大なりと謂はざる可らず。然りと雖も是れ獨り君の力のみならず、即ち君が教育の主義然らしむる所なり、君が人に教ゆる所の者は、唯文明の人となり、生活社會に立つて、敢て人に後れを取る無からんことを勤むるに在ればなり。

新島君の教育主義に至つては、全く之れと相ひ反せり。素より生活を忘るゝに非ず、然りと雖も更に高尙なる生活世界に立たんとを目的とする者なり。高尙なる生活社會とは、即ち精神的の世界にして、之れ

を宗教家としては、常に祈禱讚美をなす宗教家たるのみならず、併せて上帝の眼中に於て義とせらるゝ宗教家たらしむを欲し。之れを政治家としては、獨り利巧なる政治家たるに止まらず、併せて民を愛し國家を愛するの政治家たらしむを欲し。之を文學者としては、獨り能文なる文學者たるに止まらず、併せて正義を愛し眞理を愛する誠實なる文學者たらしめんと欲し。之を事業家としては、獨り經營力作の事業家たる耳ならず、併せて正直憐愛なる事業家たらしめんと欲し。之を人民としては獨り其衣食に汲々たるのみならず、併せて其品行性質氣風の上にて更に高尚甘美なる所の生活を得せしめんと欲す。君は果して其欲する所を達したるや、想ふに未だ達せざるべし。然れども君が達せんと欲する所の積誠は、惟ふに之れを達するの日あるべし、吾人は誠に一日も速かに其日に達せんとを望む。

凡そ事物の順序は、粗より精に入り、簡より繁に入り、卑近より高尚に入る。泰西の文明を輸入するに際して、其物質的智識上の文明の最初に來るは、素より當然の事にして、福澤君が之れを輸入したるは、吾人が實に君に向て感謝する所の者なり。然りと雖も物質上の文明は、所謂る文明の花にして、如何に美麗なりと雖も、如何に便利なりと雖も、苟も其根底を移し來つて之れが涵養を爲さずんば、一朝にして枯死せんとを懼る。然らば則ち精神的道德の文明を移し來るは、實に今日之急務にして、吾人は新島君の事業の一日も速かに其感化を天下に及ぼさんとを願ふ。勿論今日に於ても君の事業の少しく其萌芽を發したるは、吾人が聊か心強しとして、我が國家と人民の爲めに、甚だ祝する所なり。惟ふに今日に於て其勢力微なりと雖も、君が平生蒸溜する所の一種清潔甘冽なる滴水は、漸々として社會に注入するを見れば、

仰て天に愧ず、地に恥じ、天に立地、地に獨行、二君其揆を一にせり。

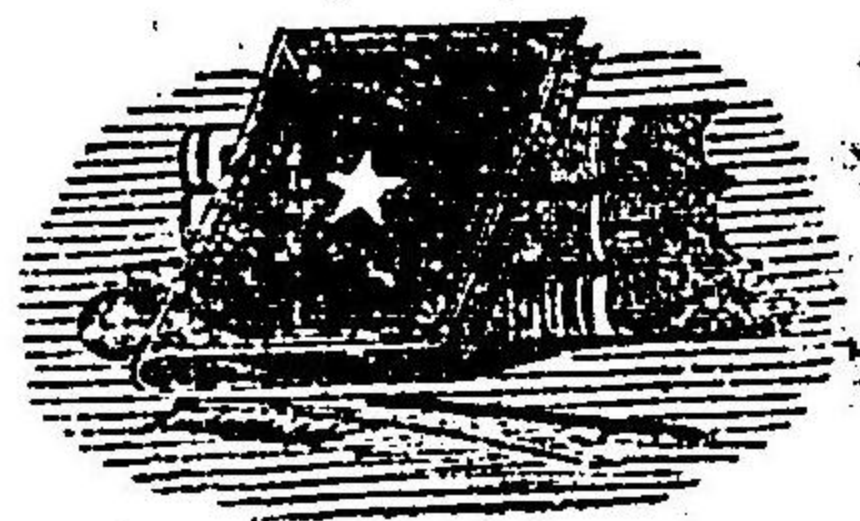
他日之れが爲めに一大奔泉となるは、蓋し遠きに非ざるべし。福澤君の事業は噴水の如し、其掀揚飛舞するや、人皆之れを望んで快と稱せざるはなし。新島君の事業に至つては、恰も木の葉を潜る清泉の如し、山寂々、林寥々、何人も氣附かざる可し。然れども水質の清潔健全なるに至つては、此れ却つて彼れに優れる者無きに非ず。

此れを要するに、古人の所謂る智者樂水、仁者樂山、智者動、仁者靜、とは、獨り二君の教育主義を評するに適當の語たるのみならず、併せて二君を評するにも亦適當の語たる可し。二君素より其志す所に於ても同しき所あらず、然れども獨立獨行、政府の力を假らず、身に燦爛たる勳章を佩ひず、純乎たる日本の一市民を以て、斯の如き絶大の事業を爲し、且つ爲さんとするに至つては、則ち其揆を一にせずんばあらず。想ふに二君が樂む所の者は、天下の王侯將相の得て與かる所に非ざる可き歟。

に非ざる可き歟。

此論を草するや、恰も同志社大學運動の創始に際す。著者胸中無限の大希望を懷きたる知るべきのみ。今や新島先生三尺の石碑、既に苔蘚を見る。朱絃誰に向て彈せむ。

著者



三島通庸君

果報なるシルラー

余は果報なるシルラーなり、敵には怨を以て勝ち、友には恩を以て勝
 てりとは、是れ古へ羅馬の英雄シルラーが自から其柩に銘したる詞に
 非すや。今まや三島通庸君——六尺の身を以て明治政府の長城となり、
 天下の有志者に對して、隱然一敵國の思ひを爲さしめたる三島通庸君
 は逝けり。吾人は今日に於て又た何をか云はん。唯たシルラー柩銘の
 詞を誦して三たひ浩歎する者なり。

今日は三島君を論ずるの日に非す

今日は實は三島君を論ずるの日に非す。凡そ人の眞面目を知らんと欲
 せば、其人の骨冷かなるの後を俟たざる可からず、况や三島君の如き、
 自から好んで世の物議と挑戦し、直情徑行、直ちに自己の胸臆を攄へ
 て、之れを事業に施したる人に於てをや。今や黨派の熱度焰々たる日

亞刺比亞人馬蹄 17

に於て之れを評論せんとせば、勢ひ酷評たらずんば、必ず諛評たらず
 る可からず。口無き死者を酷論するは、吾人が忍びざる所なり、然れ
 ども之れに向つて諛辭を呈するは、更に吾人が忍びざる所なり。况ん
 や今日に於ては、三島君が斷行したる事業の、果して社會に如何なる
 結果を與へたるか、未だ充分なる成績を豫知す可らざるものあるに於
 てをや。故に吾人は之れを一黙に附し、唯た今日に於て、我が明治の
 時代に、一人の力を以て多くの歴史を作為したる——多くの悲劇的の
 歴史を作為したる大立者の明治の舞臺より忽然として消へ失せたるを
 哀まんと欲するなり。
 三島君は實に非常の人たりしに相違なかりしなり。何となれば其行爲
 の實に非常なる者之れを證すればなり。昔し亞刺比亞人の中央亞細亞
 地方を征伐するや、トルキスタンの土人歌ふて曰く、亞刺比亞人馬蹄

の蹂躪する所、草再び生ぜすと。三島君が治蹟——若し之れを治蹟と云ふを得ば、亦た之れに類する所無きを得んや。吾人は敢て今日に於て之れを繰返すの必要なし、君が酒田に於て、山形に於て、福島に於て、栃木に於て、又た東京に於て、斷行したるの威容は、實に人をして斯くの如き思ひを爲さしめたり。吾人は今日に於て三島君の行爲の善惡を評する者に非ず、唯た斯くの如き威容を斷して行ふに至つては、必ず膽勇の大いに人に絶する者あるを信ぜずんばあらず。
然りと雖も膽勇の大いに人に絶する者は、必ず自から信する所あらざる可からず。セッキスピーヤ曾つて「ハムレット」の詞曲中に於て語つて曰く、「良心は人をして臆病ならしむ」と。苟も自から爲す所の事にして、自から信する所に反せば、如何に膽勇ある人と雖も、之れを斷行する能はざる可し。而して之れを斷行し——殊に世間の毀譽褒貶に敵

して、之れを斷行するに至つては、夫れ必ず大いに自から信する者あらざる可からず。吾人は敢て三島君が信仰の標準何の處にありしやを知らず、又た信する所ありしや否やも、得て知る能はず。然れども竊かに其平生の行爲に就て考ふれば、決して信する所なくして容易に出來得可き事に非ざるを思ふなり。——其平生に就て考ふれば、信する所ありしに相違なきを思ふなり。
思ふて茲に至れば、三島君と反對の意見を持したる人々も、其行爲は兎も角も、其心事に至つては、又た大いに寛容せざる可からざる者あらん。凡そ其意見を異にし、行爲を異にし、互ひに相争ふ時に於ては、往々反對者を罵り、彼れは謀反人なりと云ひ、彼は壓制者なりと云ふが如き事あるを免れず。此の感情動物たる人間に於ては、之れ有るも亦た強ひて咎む可きに非ざれども、若し靜かに之れを考ふれば、我れ

殊に三島君の如き人に對して

の敵の固執して動かざるは、猶ほ我れの固執して動かざるが如く、我れ自から我か行ふ所を以て最善の事と信ずるは、彼れも亦た彼れの行ふ所を以て最善の事と信するに外ならず。故に其行爲に就て若し非難す可き者あらば、相互ひに飽迄も非難す可し、唯た其心事に至つては、必ず互ひに寛容する所あらざる可からず。殊に三島君の如き人に對しては、最も然るを覺ゆるなり。何となれば自から身を萬危の叢中に投し、敢て辭せざる所以んは、蓋し大いに信する所ありしに相違なし。其仕打の猛烈なりし度に比較して、其自から信ずる度の甚た堅確なりしを知る可し。吾人は今日に於て、三島君の行爲に就て更に一言の是非を加へず、然れども其心事に就ては、聊か一言する所無かる可からず。是れ實に吾人が三島君を辨護するに非ず、總へて反對の意見を有する者に對しても、亦斯くの如くならむとを望むによるのみ。唯た惜

惜哉三

島君の
膽勇を
以て

むらくは三島君の膽勇を以て、不幸にして民間の志士と其信する所を異にし、之れが爲めに遂に千里の差を生ずるに至りたるは、實に歎す可きの至りなり。凡そ世の政治家たる者は、獨り自から信ずるの徳、自から斷じて行ふの勇あるのみならず、又た必ず時務に達するの智を有せざる可からず。後の政治家、幸ひに茲に鑒みる所なくして可ならんや。

君は其敵人の爲めに大いなる反對を受けられども、然れども其朋友よりしては大いなる親信を蒙れり。而して君が部下の心を收攬したるが如きは、是れ實に特筆す可き事なりと謂はざる可からず。汝ちに出てたる者は汝ちに反へる者なり、三島君が大いなる敵と、大いなる味方とを得たる所以んの者は、又た君が平生敵に對するの仕打と、味方に對するの仕打とを察するに足る可し。述へて茲に至れば、吾人かシル

所謂果
報なる
シルヲ

「一」樞銘の詞を誦して浩嘆するも亦た偶然に非ず。之れを要するに三島君が行爲は、雪中の足跡の如く、陽氣に遇ふて忽ち消滅する者に非ず。其行爲は歴落として、恰も鐵筆を以て巖石に彫りたる者の如く、百年の雨淋日炙を経るも、決して磨滅する能はざるを見るなり。思ふに吾人が子孫は、決して明治の時代に三島君あるを忘れざる可し。而して吾人が子孫の評論こそ、冷淡に、穩當に、正確に、感情を離れたる評論にして、茲に於て乎、始めて三島君の眞面目を見る可し。吾人は今日に於て、三島君に就て又た何をか云はんや。唯た吾人は今日に於て、三島君の記録が、後世子孫に必ず——墨を以てか、朱を以てか、特筆大書せらるゝに相違無きを預言するを以て、誓く茲に嘆惜の筆を擱せんと欲す。

森 有 禮 君

森有禮君は死せり。——此の吉祥の天地に於て、此の千載の一時に於て、文部大臣の正服を着け、憲法發布の盛儀に參列せんとする當日の早朝に、意外にも不幸にも迷信者の刃に罹り、終に之か爲に果敢なくなられたり。

吾人は平生君と教育上の問題に於て、竊かに意見を異にするものあるを信ずるものなり、故に機會もあらは君に向つて教を乞はんと欲したる者甚た慚しとせず。然れども今や君は逝けり——殘刻なる最後を遂げて逝けり。吾人は又た何をか謂はん。唯た君か功業に於ては、國民たるものか大ひに感謝すへきものあると、君か性質に於ては、國民たるものか聊か記憶すへきものあるか爲に、茲に君か爲に一文を草せざるものか聊か記憶すへきものあるか爲に、

るへからざるに至れり。
 概して謂へば君は偏理家なり。奇矯なる偏理家なり。而して之を行ふに至つては、又た動かすへからざるの意志と膽氣とを有せり。即ち獨り胸中に於て其の奇矯なる意見を貯ふるに止まらず、敵の面前に於ても味方の面前に於ても、憚らす之を公言し、賛成者あるにせよ、反對者あるにせよ、臆するとなくして之を斷行するの人たりしなり。即ち君は奇矯なる偏理的の改革家たりしなり。君の事業は千種萬別なりと雖も、總て此の性質を以て一貫せざるはなし。唯た其の性質の動く所一正一反し、君か一生の歴史に於て大ひなる原動及び反動を見、而して其の反動なるものは、不幸にも吾人か稱賛する能はざる——君か死後に於ても稱賛する能はさりしは、甚だ歎惜に堪へざる所なり。嘗て横井小楠翁の日記を案するに、明治元年の末京都に於て森金之丞

と大ひに米國議事院のとを論し、快談夜に徹すと云ふの節あり。當時小楠翁は開港論者の泰斗にして、然かも明治新政府創立に與つて其の力甚だ少なからさりし人なり。而して其の君に於ける傾倒此の如くなるを見れば、君か米國の新鮮なる自由の空氣を呼吸し來り、其の年少氣銳の資を以て、平生の斬新痛快の論を發したるの情思ひ見るべきなり。舊政府を倒したるの功業は固より他人にあり、然れども新政府の制度を建設したるは、君か力又た少きにあらざる可し。然りと雖も吾人は君を論するに、敢て政治家として論するを欲せず。思ふに君は政府中に於て輕からざる位置を占むると二十餘年。其の三分の二は外交官として經歷し、特に明治十八年の改革以來文部大臣の椅子を占めたるものなれば、多少の功績は必ずあるならんと雖も、吾人は寧ろ之に就て觀察を下すよりも、他に君を一箇の人物的の形象と

し、君が性質の最も著明なるもの、又た其の國民が感謝すべき事業に就て、觀察を下さんと欲す。
 戊辰の役漸く過ぎ、世間尙ほ血腥き風吹き度る最中に廢刀論を主張したるものは君なり。廢刀の事たる輕きに似たりと雖も、刀劍は即ち武士の精神にして、よじ刀劍を棄つれば、直ちに武士の精神を棄つるとは覺束なしと雖も。武士なる一種の階級を溶解せしめ、之が爲に我邦の人民をして永久常備軍なる一種の武士を養ふとなく、之が爲に武士てふ一の階級を社會に杜絶するの端緒を啓くに至りては、大ひに感謝せざるへからざるものあり。然りと雖も是れ其未なり。我邦に於て、婦人の——此の攫噬的動物の世界に於て優美なる天使の價値を、人間としての、男女同等としての價値を認識したるものは、君にあらすして誰ぞ。始めて男女同權論を叫破したるは君なり。始めて一夫一婦論

を主張したるは君なり。相方の協議に依り證人を立て、命令強迫的の結婚にあらすして、契約的の結婚を實行したるは君なり。凡そ我邦に於て柔軟性の恩人たるものを擧げば、吾人は必ず先づ君を推さざるへからざるを信す。若し我邦の女性にしてシヨールシ、イリオットの如き、マダム、ド、ステールの如き人出で來らんか、其時に於て此等の人をして其の能力を發揮し、其才華を煥發せしめ、社會に向つて一生面を開かしめたるものは、實に森子か滿望荆蕪の中に在つて婦人の爲に道路を開拓したるの恩惠たることを忘るへからず。
 獨り是れのみに止らず、君は大ひに我邦に於て自由討論の實を踐行し、特に彼の明六社(明治六年)なるものを設け、當時に於て改進的の學者を聚め、頻りに政治社交其他の問題を討論し、之を天下に發表せり。
 吾人は今日に於て學士會院なるもの、存在するを知る、然れども之を

以て當時の明六社に比すれば、其の議論の活潑にして生氣ある、其の全國の注意を惹起するは、此にあらすして彼にありしを知るなり。吾人は親しく其社に参したるものに聞くに、君か福澤諭吉君に於ける、恰もボルックかマヨソフンに於けるか如く、機鋒縦横、旗鼓堂々相摩し、相當り敢て少しも遜らざりしと謂へり。又た以て君か明六社に於て重きを有したるを知るへし。君か明六社に重きを有するを知らば、亦た其の一言一行の進歩的社會に大なる重きを有したるを知る可し。

教育の事に至つては感謝すへきもの固より少なからず、女子教育の大切なるを世人に識認せしめたる、商業教育の必要なるを世人に識認せしめたる、是れ皆な君の力與つて大ならずんはあらず。而して其の文部大臣として施行したる教育上の政略に就ては、感謝すへきものもあり、感謝す可らざるものもあり。然ども我邦に於て大臣たるものにし

て、自ら一省の主腦者となり、直ちに自家の腦中にある企圖を擧げて、之を省中に——一隅より他の一隅迄、實行するに至つては、果して幾人かあるや。若し其人ありとせば、君も亦た其の一人なりしは、吾人か慥かに承認せんと欲する所なり。特に文部省の如きは、君か大臣となるまでは、概して道中双六の休息所にして、或は之に入り或は之より出づる、逆旅的の有様たりしなり。昔しルイ王の幼きや、大僧正マザリン其政を攝したり、マザリン死するや、近臣王に向つて問て曰く、是れより國事は誰れに諮詢すべきや。王答て曰く朕に向てと。森君か一たひ文部大臣となりしや、君實に自ら其の省務に當りしなり。君は其名に於ても、其の實に於ても、文部大臣たりしに相違なかりしなり。吾人は之を見ても君か碌々奇節なく、漫に伴食宰相たるを甘んずるの人にあらざるを信せざるを得ず。

竊かに君の一生を案ずるに、最初に於ては非常なる自由家なり。非常なる急進家なり、最後に於ては非常なる（若し此語を用ゆるとを得べくんば）保守家なり、非常なる専制家なり。最初に於ては君は耶穌教信者たりしなり。君は其心に於て幾何の信仰を有したるか知らされども、洗禮を受けたる人なり。而して特に嚴格なる基督教的の道徳を守りし人なり。前きにも謂ひし如く、議事院論と云ひ、廢刀論と謂ひ、政談と謂ひ、女子に関する問題と謂ひ、總へて急進主義たらざるはなかりしなり。君は實に其の前半の生涯に於ては、我邦思想上、社交上、政治上の大なる刺激者——若し先導者と謂ふを過當なりとせば——たりしなり。甚しきに至つては君を目して洋癖家と謂ひし人すらありしなり。何となれば、君が國語を廢し、英語を以て我邦の教育を支配せんとするの意見を公けにしたる程なりしを以てなり。要するに君は當

時に於ては重もに米國風の感化を受けたるか如く思はる。而して中年以後に至つては其の形情一變し、宗教に於ても甚た冷かなる人となれり。特に上帝を信するも、阿彌陀を信するも、日月、偶像、幣帛、天狗、狐狸を信するも更に區別する所なきか如く。而して政黨及び政論の如きも餘り好ましく思はざりしか如く。而して特に其の教育の主眼としたるものは武事教育にして、凡そ教育の世界を擧げて、上大學校より下小學校に至るまで、凡そ生徒として學校にあるものをして兵隊の資格を帯はしむるを以て、其の教育の一大主眼となしたるものゝ如く。小學生徒に木銃を擔はしめ、師範學校生に向ては半は兵營の如き生活をなさしめ、殆んど變則兵士とならしめ、高等中學校の如きに至つても、頻りに其の傾向に運動せしめんと欲したるものゝ如し。思ふに此の如きとは、君に於ては唯た腕力を好むか故になしたる

にあらざるへし、是れ皆な君に於ては深き理由ありしことならん。君曾て謂へるとあり、今日の教育に於て大切なるもの三、曰く品格を保つと。曰く従順なると。曰く他人に對して同感情を發すると。而して此の三個のものは武事教育に由て達せらるゝを得べし。何となれば武事教育は人をして嚴肅ならしむるものなり、長上の命に従順ならしむるものなり、各々行伍の間に於て相互ひに昆弟の好みを發せしむるものなり、而して此三者の性格を備へたる者は則ち國民の本分を盡すを得可き者なりと。故に君は此國民的の氣風を養成するを以て、教育の一大主眼となしたるなり。要するに君か後半の生涯は始終國家の二字に其の精神を併呑せられ。生徒は國家の爲に學問をなすものなり、學校は國家の爲に人民を造るものなりとは、君か須臾も忘れざる注意語にして。即ち君か刺殺せられたる數日前帝國大學に於て演説したる

も、之に外ならざるを見れば、君は其の後半の生涯に於て、歐洲大陸風の感化を受けたと少からざりしを知るべし。此の如く其の前半に於ては米國風の感化を受け、其の後半に於ては大陸風の感化を受け、前半に於ては一個人的の主義を主張し、後半に於ては國家的の主義を主張し、前半に於ては非常なる急進家となり、後半に於ては非常なる保守家となり、前半に於ては自由言論の勇將となり、後半に於ては擅制主義(或る惡意味に於て)の保護者となり、特に前半に於ては人民より武器を取り去るの廢刀論を主張し、後半に於ては人民に強て武器を授くるの武事教育の斷行家たるを見れば、吾人が其の一生に於て一正一反の原動反動ありしと謂ふは、敢て過當の品評にあらざるを信す。而して此の如く一方より他方に赴きたるに拘らず、恒に極端より極端に走り。而して世人か舊習に戀々たるの日には、舊

習の破壊者となり、世人か舊習を破履の如く抛ち去るの日には、却て舊習の保存者となり、復古者となるを見れば。君か流に順ふて棹すのみにあらずして、流に逆ふて遡るの人たるは明白なる可く。而して其の獨決自斷胸中先づ自家の考案を描ひて、之を世に行はんとする——恰も小學校生徒か白墨を以て黑板に畫くか如く——の實蹟あるを見るに到りては、之を奇矯なる偏理的の改革家と品評するも、君に於て遺憾なかる可し。

凡そ好んで自己の意見を立るものは勢ひ奇矯となる。奇矯尙ほ可なり。然れども其極終に他人の意見議論を聽くとをなさず、執拗して自ら誤り人を誤まるに至つては、甚だ歎せざるを得ず。吾人は森子か初めに於ては人の未だ唱へざる時に於て、進歩の主唱者たるを喜ぶと共に、人の既に漸く改進に赴く時に至つて、却て復古的の改革家たりしを歎

惜哉君
は復古
的改革
家と成
れり

するなり。時に依りては復古の事業も一種の改革なるとを記憶せよ。君は此頃屢々謂へり、維新前の書生は此の如し、維新前の教育は此の如し、武士の精神は此の如しと。蓋し其の意現今の有様に満足せずして、却て舊時の有様を慕ふものゝ如し。現今の有様に満足せざるは可なり、然れども之が爲に舊時の有様を慕ひ、特に世の保守家と合躰して、以て育英の事業を擧げんとするか如きに至りては、吾人甚だ君の爲に惜まざるを得ず。

吾人は君が果して如何なる信仰を有したりしかを知る能はず、然れども君は實に拜自己宗の信徒——熱心なる信徒たりしに相違なきを認むる也。若しそれ君の記憶にして後世迄保存せらる可しとせば、君は漫々たる歴史の記録に於て、グレゴリー、王安石、ヘンリ、ワン等一列の末尾に其の名を挿むとを得ん。何となれば其の程度こそ相違あれ、

拜自己
宗の信
徒

グレゴ
リー、

其の種類に於ては皆な同一の分類に属す可き偏理的の改革家なればなり。泰西の詩人歌ふて曰く、

樂みは來り而して往く、望みは波の如く寄せ來れば流れ去る……
夢は結へは覺め、朋友は春花の如く笑ひ又た死す、吾々の浮誇なる生涯は一の永久なる葬禮なり、人は其の死せる望みに向つて、苦^ビがき涙を以て墳墓を穿つものなり、

嗚呼人生朝露の如し、譬へば幾何ぞ。吾人が森子を年少有爲の急進家と認めたるは昨日の如し。而して其の後半の生涯には大ひなる變化をなし、而して其の變化の上に更に大ひなる變化をなして死せり。吾人及び吾人が子孫は、森子の爲め岷山の碑に對する如く、涙を流すもの幾人あるや知る能はずと雖も、我邦の開化史に於て、一個の奇矯なる偏理的の改革家ありしとを記憶し、而して其の功業に於ては之に感謝

し、其過ちに於ては後人の龜鑑となるべきものあらば、即ち其人は森子ならんとを信せずんばならず。



板垣退助君

政治家の徳義

後藤伯の入閣は更に世人に向て一の秘密を告白せり、曰く板垣伯も亦政府に入らんとすと。吾人は此語の必ずしも好事者の捏造に出でたるに非らざるを信す。何となれば世上に流傳する所によれば、後藤伯が入閣に關する重なる辨解は、實に板垣伯も政府に立つことを承諾したるか故に、後藤伯も板垣伯と俱に左提右携して政府中に在りて、運動をなさんと欲するが爲め、内閣に入りたりと明言したりとすればなり。

吾人は今日に於て、之を確然の事實として論ずるを得ず、然れども以上の理由に由て、蓋然の事實として之を論ずるを遲疑する能はず。

かきには板
す立政何垣
るん府故伯

吾人は必ずしも板垣伯の政府に入るを非難せんとするものに非らず、然れども事情次第に於ては、吾人は如何に板垣伯に向て平生敬愛の情を表すと雖も——それたゞ平生敬愛の情を表するか故に、敢て他人に雷同して賛成の辭を呈する能はざるを覺ゆ。

板垣伯は如何にして政府に立たんとするか。何故に政府に立たんとするか。政府に入つて如何にせんとするか。吾人は之れが充分の理由を發見する以上は、必ずしも其の政府に立つを拒まんと欲するものに非らず。然れども苟くも板垣伯にして政府に立たんと欲せば、吾人はまづ板垣伯に向て其の返答を請求するの止むへからざるを見る。而して伯が吾人に向て其の返答の辭を發せらるゝに先きたち、先づ是等の疑問に對して反覆熟考せられんとを望まざるを得ず。

吾人は平生維新の功臣を萬能の靈力あるものと認むる能はず、從て吾

人は維新の功臣に向て、特別なる尊敬を呈するものにあらず。然れども板垣伯に對しては、其世上の毀譽交々伯の一身に集まるにも拘はらず、吾人は實に伯に向て、一種特別なる尊敬を有するものにてありき。蓋し才能伎倆の上より之れを論ずるときは、維新の功臣其の他我が政治社會に有名なる人士の内には、随分伯を駢び驅つて、敢て一步を譲らざるものもあらん、或は之に優るものもあらん、然れども吾人か伯に對して特別の尊敬を有するものは何ぞや。伯が政治上の相場師にあらざるを以てなり。臨機應變者にあらざるを以てなり。其行爲は千差萬別なりと雖ども、自ら一定の主義を持って一貫したるを以てなり。吾人か見る所を以てすれば、我國の政治家中には磊落雄豪なるものもあり。深沈重厚なるものもあり。聰明才辨なるものもあり。然れども概して之を評すれば、彼等は多くは順風に帆を上げ、逆風に帆を捲くの政治

家にして、未だ一の羅針盤を持って逆風に關せず順風に關せず、一定の目的に向て蒸氣力に鞭ちて突進せんとするものを見ず——板垣伯を除いて殆んど之れあるを見ず。吾人か伯に向て重きを致したるものは固より茲にあり。而して二十年間伯が毀譽褒貶の内を立て、尙ほ天下の重きを任したるは即ち茲に在り。是れ實に板垣伯の板垣伯たる所以にして、伯の安身立命の點は即ち此處にあるなり。

伯の明治十五年岐阜に於て、刺客の刃に觸るゝや、伯か平生の心事は倏忽に其の口を衝て曰く「板垣死すとも自由は亡びず」と。此一句は實に伯か千萬無量の精神を湛へたるものにして、以て伯か畢生の精神を表彰する第一の雄辯と云ふべく、以て伯か身後碑文と云ふべく、以て明治歴史上の大落墨と云ふべし。吾人敢て多言せず。何となれば多言するも、之を説明するに充分なる辭なきを以てなり。多言せざるも赫々

明治六年以來、
明治政府に
對して、
充分なる
辨解の道
あらばよし。
苟も然らざらんか、
吾人は伯の爲に
天下の清議を恐るゝなり。
——單り、今日のみならず、
天下後世の清議を恐るゝなり。

として一世に耀き居るを以てなり。而して此板垣伯にして突然政府に立たんと欲す、若し天下に對して充分なる辨解の道あらばよし。苟も然らざらんか、吾人は伯の爲に天下の清議を恐るゝなり。——單り、今日のみならず、天下後世の清議を恐るゝなり。

二十年來明治政府を見れば、恰も一の旅館の如し。日々に入るものあり、日々に去るものあり、維新の功臣の如きは或は出て、或は去り、其の去就進退一にして足らず。然れども明治六年以來徹頭徹尾明治政府の反對黨となり、常に明治政府に向て、或は恐怖を與へ、或は困難を與へ、或は面倒を與へ、或は奮激を與へ、之を警醒し、之を刺激し、之をして其の政府外に大敵あるを知らしめたるものは板垣伯なり。伯の勢力は十餘年來時に消長なきに非すと雖ども、其の反對黨たりしとは分毫と雖ども枉くる所あらざりしなり。されば明治八年大阪の會議

千軍萬馬の味方
も大に切
な良切
心あるに
て恒に
伯を擁護
したる

に於て、伯は再び政府に立ちしと雖ども、其立ちたるや、頸を掉り、尾を垂れ、伴食宰相となつて自から甘んじたるものに非ずして、其の入るや、入るべき理由ありしなり。其の出つるや、怫然として袂を拂つて去れり。其の島津久光公と相合して政府を去りたるが如きは、幾分か世人の怪しみを來したりと雖ども、其の去るや、又去るべきの理由なきに非らざりしなり。故に伯は再び政府に入りたりと雖ども、毫も其徳を二三にせず、常に反對黨として始終を貫きたりき。而して其反對する所以は明治政府を威嚇して、其位を買はんとするものに非ずして、他に必ず其の仰いて天に作ぢず、俯して地に愧ぢず、外、社會に耻ぢず、内、心に羞ぢず、伯の爲めには千軍萬馬の味方よりも大切なる所の良心ありて、恒に伯を擁護したるや知るべきなり。吾人は「板垣死すとも自由は亡びざる」の語に由て之を知るを得るなり。而して

今日伯は政府に入らんとすと云へり、伯にして若し其理由あらばよし、苟も故なしとせんか、伯は實に其の半生の履歴を塗抹し去りたる者と云はざるべからず。伯は此の良心を如何せんとするか。

板垣伯が政府に立つことを正認すべきの事情は唯た一あるのみ。曰く政府が伯の意見を採用し、伯をして其欲する所を行はしむるの一事是れなり。苟も此の如くならんか、吾人は伯の政府に立つを拒まざるなり。——伯の一身の點より云へば、吾人又多少議論なきに非ずと雖ども、伯が公共上の行爲として之を見れば、決して非難するの點あらざるなり。然れども若しそれ然るとなくして、唯た政府に立ち——後藤伯の内閣に入りたる如く、曖昧糲糊の間に政府に入らんとするか如きとあらば、獨り其の板垣伯の一身の行爲として甚た惜むのみならず、明治世界の一政治家として、在野黨の泰斗なる主領として、清操大節

ある人物として、吾人は轉た之を痛恨せざるを得ず。何となれば是れ實に伯の爲すべき所にあらざればなり。伯は是れ迄一直線に歩るき來り、今日に至りて俄然曲線の歩行を爲すべきものに非ず。人各々長ずる所を以て世に處すべし、陰謀籠絡の如きは伯の長ずる所に非ず。而して其の自ら安身立命の地を去り、其の長ずる所に非ざる所を以て、自ら世に立んとするは、獨り其の公共の行爲より不可なるのみに非ず、其の一身上處世の點より見るも、又た大ひに不可なればなり。此時に至れば伯は獨り板垣伯たる獨自一己を失ふのみならず、恰も鷄か鷺を學んで水中に游泳するか如く、其の自ら覆没を取るは、又自ら知るべきなり、豈に痛恨すべきの至りならずや。

人或は曰く。伯にして政府に入らんか、少しく其の思ふ所を枉ぐるも、亦少しく思ふ所を行ふを得へし、若しそれ政府に入るなからんか、

軻辭悒遂に爲すことなくして、海南の山中に朽死せんのみと。嗚呼是れ利害の論なり。吾人は已を曲けて人を直うすることを聽かず、伯にして其の端直勁正の氣節を棄て、臨機應變的政治家の彌縫細工に使用するの材料となり、而して尙之れを以て策の得たるものと爲すか。凡そ世の大人なるものは、必らずしも大ひなる事業を爲すものにあらず、小人にして或は大ひなる事業を爲すものあり、大人にして或は大ひなる事業を爲す能はざるものあり、而して大ひなる仕事を爲さずして、尙大人たる所以のものは何ぞや、蓋し人の尊ぶ所は獨り行爲に存せずして、其の心に存するを以てなり。彼れ一の大ひなる事業を爲さず、然れども其の一生を感化し人の軌範となり、社會の明光となるものは何ぞや、其の積誠の自ら溢れて四表に發射すればなり。ポラは天幕を造つて以て其の生を營めり、ルーテルは園丁となり、若しくは

音樂師となつて其の口を糊せり、ダンチの如き、ミルトンの如き、皆な軻辭悒骨に入りたるものなり。而して百世の下、天下の人をして、其の風を聞て起たしむるものは何ぞや。豈に其の車馬の美、衣冠の莊なるか爲めのみならんや。如何に箕の如き大冠を戴くも、其の人の心事にして碌々たらば、其の人は到底暗黒塲裏に永眠せんのみ。故に板垣伯にして、若し板垣伯たらば——吾人は是れ迄識認したる如く——板垣伯か政府に立たすして一事を爲すことなきも、毫も憾みとする所なし。何となれば此臨機應變的の世に於て、一人にても伯の如きものあり、我が政治世界に於て、隱然清淨光明の木鐸となるものあれば、伯は自ら爲す所なきも、是れ實に大に爲す所ありたるなり。人間は特り物質的の動物に非ず、彼の人を品評するに其の行爲と外形とを以てするものは、是れ猶身幹の寸尺を計りて以て其の價值を定めんと欲す

若し伯は、
迄に大規模に
摸るに大規模
の富を大規模
見識の富を大
明識の富を大
以て之を大

るの類なり。今日我國に必要なは大なる行爲にあらすして、大なる精神なり。利口なる智慧にあらすして、正大なる氣節なり。板垣伯にして若し之れあらば、其の他は則ち數ふるに足らざるのみ。

故に吾人は伯が民間に在りて爲す所なきにせよ、尙毫も憾みとせず。何となれば爲す所あらんとして、之を棄て、政府に立つか如きは、是れ實に伯の爲めに賢き貿易にあらざればなり。然りと雖も吾人は板垣伯か決して爲す所なきを信する能はず。何となれば伯が十餘年來種子を下したるものは、今は漸く收穫の時節に近かつけり、伯にして若し其の今日迄の伯たらば、尙ほ其民間に於て一方の主領たるを得べし。若し是れ是れ迄の伯にして之に加ふるに規模の大と、經驗に富めると、見識の明かなるとを以てせば、伯の向ふ所天下敵なけん、而して伯は是等の收穫物をも棄て、尙政府に立たんとするか。

尙ほ板垣伯を併呑するの力ありや否や

吾人は我が明治政府は恰も太陽の遊星を引く如く、非常なる引力を有するを知る。而して無數の遊星は悉く此引力の爲めに致されて、今や太陽の内に併呑せられたるを知る。而して此引力は此の大ひなる收穫を犠牲としても、此の大ひなる實歴を犠牲としても、此の大ひなる主義を犠牲としても、此の大ひなる良心を犠牲としても、尙ほ板垣伯を致して其の内に併呑するの魔力ありや否や。若し是れありとせば、吾人は唯九天を仰いで長歎息するの外なきなり。

此論を草するや、果然板垣伯政府に入らず、時勢の然らしむる所も雖、亦た板垣伯の大節を見る可し。

著者



政界の三隱居

伊藤伯、大隈伯、井上伯、

漢室の當時には商山の四皓あり、明治二十三年の今日には政界の三隱居あり。四皓の山に隠るゝ、高帝の天下を平定するに於て何か有らん、留候、蕭何、韓信の輩、籌を運らし、用度を調へ、敵を攻むるの時に於ては、四皓亦是れ無用の人のみ。我か政界の三隱居は、果して是れ無用の人なる乎。否々何をか三隱居と云ふ。曰く、大隈伯、伊藤伯、井上伯是なり。若し黒田を併せて之を言へば、四隱居と云ふも不可無きなり。然れども黒田伯の如きは、必ずしも政治家として社會より指目せらるゝ人に非ず、吾人は寧ろ政界の三隱居と云はん。

この三伯は、其性情、行徑、各一家の特資を具へたるに關せず、卓然として政界に於る第一流の政治家たるとは、敵も味方も之を識認し居

何をか
三隱居
と云ふ

我社會
の多事
は三隱
居を長
くし居
て居た
らしめ
ら

るなり。而してこの第一流の政治家が、此の明治二十三年の危局に際して或は餘義なき外部の事情よりして、或は自家の道樂よりして、飄然袂を拂つて政界の外に徜徉せんとは、殆ど吾も人も、思ひ居らざる珍事にこそあれ。

吾人は今何か爲に彼等が隱居と爲りたりしやを説かざる可し。但此の隱居は永遠の隱居なる耶、抑亦た世俗の所謂三日坊主にして忽ち還俗し來る耶、言歩を進めて云へば、彼等は政界に於て未來を有する者なるや否やの一點をば、讀者と共に推窮せんと欲す。

請ふ吾人をして豫言せしめよ。我社會の多事なる、三人の政治家をして長く閑地に徜徉するを容さざる可し、彼等は皆な期年ならずして、否或は期月ならずして直接間接政治上に重きを有するに至る可し。否今日と雖固より重きを有し居るなり。

而して其重きを有するに就ては、何人の前途か最も多望なるか、何人の前途が最も少望なるか。斯の如きとを推論せんとするは、幾ど常情の許さざる所なるが如しと雖、眼孔若し前途を射るとあらば、亦必ずしも沈黙するを要せざる可し。

過去の経歴より察すれば、伊藤伯の生涯ほど多幸多運なるは非ざりしなり。伯や微賤より起り總理大臣と爲れり。鎌足公以來明治十八年に至る迄、藤氏に非ずして總理大臣——當時の所謂關白太政大臣と爲りたる者は、足利義滿、豊臣大閥、徳川家齊、伊藤博文の四人あるのみ、豈亦た榮なりと云はざる可けん哉。

君が出身の経歴に就て考ふれば、維新前の事は暫く之を措き、維新後に至りては、殆ど人をして五歩に珠玉を拾ひ、十歩に珊瑚を陥むの想あらしめたり。初め木戸氏に識られ、中ころ大久保氏に識られ、終り

に滿朝の諸老に推され、其の兵庫縣令よりして總理大臣と爲りたる、幾ど飛龍雲に躍るの勢ありと概言するも、未だ必ずしも過當に非ざる可し。斯の如くにして總理大臣と爲り、運窮まりて樞密院議長と爲り、幸にして條約改正の波瀾外に立てり、否波瀾を惹起すの原因と爲りて、去り、再轉して宮中顧問官の清職を奉し、小田原幽居の一閑人となれり。而して大隈伯は其波瀾の爲に失敗したり。是に由りて觀れば伊藤伯の前途は如何。大隈伯の前途は如何。

若し吾人をして大膽に言はしむれば、條約改正の一事は、實に二伯の前途を指定するの一大關鍵にして、而かも伊藤伯は之が爲に失ふ所のもの甚だ多く、大隈伯は之れが爲に得る所の者甚だ多し。若し政治家に要する所の者の第一資格は、國民の政治家に對する信用に在りとせば、伊藤伯は之に因りて其信用を減殺し、大隈伯は之に因りて其信用

を增加したり。大隈伯は失敗せり、然れども無形上の勝利を獲たり。伊藤伯は成効せり（或意味に於ては）然れども無形上に於て失敗せり。二伯の前途を察せんとする者は、亦宜しく此處に鑑みる所あらざる可からず。

大隈伯の經綸の才に富むは、人皆之を知れり。然れども其の幅強雄鷲毅然として奪ふ可からざる大節に至りては、條約改正の騒動に依りて始て國民に證明せられたり。政界に於て伯の敵たる者甚た少しとせず、伯が計畫したる條約改正其れ自身に就ひて異存を抱くもの、殆ど國民の多數を占めたり。然れども伯が條約改正の方面に當り、其衆難群議の重圍中に安歩して、敢て動かず、百艱、百勇を生じ、千難、千策を出し、愈々窮して愈々生路を斫り開くの膽勇智謀に至りては、之に最も感服するは乃ち伯に最も反對したるの人々に在る可し、即ち伯

が政治家として、其信用は殆んど伯と俱に天を戴かざる敵に迄及びたりと云ふ可きのみ。其信用を得たる所斯の如し、條約改正の失敗の如きは、只是れ眼前の小事のみ（伯に取ては）。從來伯に向て敵意を挾むの論者は、動もすれば伯を比するに呂惠卿を以てせり。然れども公平に之を觀察すれば、伯は寧ろバームルストン一流の政治家と云はざる可からず、而して殊にバームルストンに類似する所尠からざるが如し。其人を籠蓋するの略ある、其の愈々進んで愈々飽くことを知らざる、其の權略百出する、其の抑ゆれば愈々揚がり、窮すれば愈々達するの作用を有する、其の死中に自若として活を求め、以て國民の倚信を博するが如き、何ぞ相類するの酷しきや。唯其の異なる所は伯は未だ必ずしもバームルストン程に快活ならざるなり、バームルストン程に華麗ならざるなり、バームルストン程に雄辨ならざるなり。

一箇の伯の
改進黨は
限進部の
改進黨の
に敵す

前途如
海

り、然れども亦恐らくは、財務上に於ては、又た施政家としては、
ハイメルストンも或は伯に及ばざる所の者あらん。而して其遠圖宏謀、
胸に偉大の經綸を書き、双手に之を執着して、其の必成を期するが如
きは、寧ろワルポールに似たりと云はん。頼襄嘗て勅勒の歌を評し
て曰く、唯一首の歌、以て文選の下半部に敵すと、吾人は伯を以て、
幾ど改進黨の全部に敵すると云はんと欲す。是れ吾人が改進黨を輕ん
ずるに非ず、伯を重しとすればなり。

大隈伯にして以上の如しとすれば、其前途は實に多望なりと云はざる
可からず。伯が爲すべき事業は寧ろ過去にあらざして、今後に在りと
云はざる可からず——伯の健康如何に依りては。伯の如きは之に反す。伯が條約改正に於けるの舉動、甚だ曖昧な
るは、獨り伯の敵のみならず、伯の味方と雖或は苦情を鳴したる者あ

之に伯反
は藤伯の
平生の弱
點を露し
たり

らん。而かも一旦事あらんとするに在んでは、慧眼機を見て脱然逸舉
し、復た人生に風波の何物たるを知らざるが如き、其一身の爲に計る
固に異存なかる可し。然れども政治家として聖天子の知を辱ふし、特
旨を以て内閣に列し、至高顧問に議長たる身分にして、而かも當時の
政府中第一流の人物として、果して懷に疚しき所なからんや。吾人は
伊藤伯に向て恩怨なし、然れども伊藤伯平生の弱點は、當時に於て大
に發露したる所の者あるを認む、我か國民も亦た之を認む。故に將來
或は忠告者として伯より忠告を聽くとある可し、評議者として伯の垂
示を請ふとある可し、然れども施政者として、執權者として其局面を
調理するの一事に至りては、我國民は恐らくは甘心せざる可し。
吾人は斯の如く言へばとて、敢て伯の名譽を毀損せんとするに非ず、
只國民と共に眞個の伊藤伯を知らんと欲するのみ。伯の才子たる人皆

吾人は感ふに國民も我は之に感ん

な之を知る。其の眼界の今日に止まらずして、明日に及ぶ(明後日の事に至りて吾人之を保せず)人之れを知る。其の思想の局部に偏せずして大躰に及ぶ、人或は之を知る。其の立法上の伎倆若くは嗜好を有する、人固より之を知る。圓滿なる政治家として誰か伊藤伯の右に出る者あらん。然れども疾風勁草を知るの時に方り其れ奈何、吾人は之に感ふ、我國民も之に感はん。吾人は如何なる機會に遭遇するも、再び伊藤伯の總理大臣の位置に就くが如きとを、或は見ると能はざるを憾みとするのみ。

若夫れ井上伯に至りては、國民皆な其爽利精悍當るべからざる巨人たるを識認すと雖、伯は不幸にして國民より信用せられず、吾人は實に是を以て伯の不幸と信ず。伯は何が故に斯の如く國民より不信用なるか、伯の一舉動は何が故に衆人の猜忌の眼、猜忌の耳の中心點となる

社會の舞臺に於て惡形視せらるる者も伯は也

井上伯は毀譽兩に其實に過ぎたる如し

か、伯何が故に社會の舞臺に於て、惡形視せらるるか、吾人實に其所以を知らず。伯は或部分に於て熱心なる、朋友、伴侶若くは附隨者を有すれども、亦た他の部分に於て敵を有す、而して其の中間に在るものは伯を信用せざる者多きを見るなり。是豈に伯が其才鋒の甚だ穎脱すると、其舉動の能く豹變するに據るか。曰く然り。

蓋し井上伯は毀譽兩から其實に過ぎたるに非ざる耶。伯が伎倆を有する固より世人の云ふ所の如し、然れども伯未だ必らずしも鬼神に非ず。伯が缺點を有する亦世人の云ふ所の如し。然れども伯未だ必らずしも奸惡の人にあらざる可し。若し吾人の見る所を以てすれば、伯は寧ろ豪俠の魁にして、幡隨院長兵衛的人と云はざる可からず。日報記者は繰返し伯を以て、涙脆き人と云へり、吾人も亦必ずしも之を以て、日報記者の辨護説と思はざるなり。只惜むらくは醇乎として醇なる者に

井伯の爲に惜むは、其の傍若無人の爲に惜むは、其の事變は、其の豹も一豹も

非ず、彼處に大醇なれば、此處には大疵あり、豈所謂才力身の祟りを爲すものに非ざる歟。

獨り井上伯の爲に惜むは、其の舉動の傍若無人なると是なり。如何に不平なればとて十二月間の腦病も少しく長からずや。身堂々として大臣の印を帯ひながら、内閣鼎沸、國論蜂起するの時に於て、竹林の七賢人を氣取るも、少しく不穩當ならずや。而して特に惜む所は、其豹變の一事是なり。君子豹變す、固より豹變すべき點に於て豹變するは、君子の美なりと雖、井上伯は不幸にして豫しめ多年の計畫を爲し、着々一步を進み、終に累積の力を以て其功を遂ぐるが如き業を執る能はず。之れを要するに其銳氣勃々として當るべからず、其一たび決心したる時に於ては、鬼神も猶ほ避くるが如き意氣を鼓して之に衝ると雖、動もすれば倦み易く、動もすれば厭き易く、動もすれば操守の功

我が政界の早晩は此の隨院の長を要する時ある

を全ふする能はず、其の赫奕燦爛として人目を射るも、只流星の飛動するが如くに過ぎ去るは、寧ろ伯の爲に惜むべき事に非ずや。此點よりすれば伯は政黨の首領として大なる缺點あるが如し。吾人は此缺點をば敢て井上伯の勢力を滅殺せんが爲に指摘するに非ず、たゞ嘆惜の餘りに指摘するなり。今日に於て天下伯に向て惡口を吐かざるもの少し、吾人亦何の好む所ありて、今更漆上墨を加ゆるを要せんや。

然りと雖我邦政界の前途を瞻れば、墨よりも黒し、唯恐る我政界は、早晩此政界の幡隨院長兵衛の力を要するの時來らんとを。是れ國家の爲に不幸と云ふべき耶。井上伯の爲に多幸と云ふべき耶。吾人は之を知らざるなり。今若し三伯をば政治主義上より分類すれば、井上伯は其性質、急激黨に傾き易く、伊藤伯は其性質、保守派に傾き易し。人或は大隈伯を評

して、伊藤、井上二伯を混合したるが如き人物なりと云へり、斯言當るや否やを知らずと雖、其の政治上の主義に至りては、恐らく大隈伯は其中間に在るが如し。唯吾人が大隈伯の爲に惜む所は、動もすれば其の經綸、貴族的の臭味多くして、平民的の傾向少きと是なり。大隈伯は實に有力なる政治家なり、然れども未だ決して吾人が注文通りの政治家に非ざるなり。其所謂改進黨は舊時の改進黨にして、今日の改進黨に非ざるなり。然れども伯をして平民的の政略を擧行せしむると否は、伯を補佐する後進政治家の力如何に據る。

豫言果して適中す、今日の政界は大隈伊藤二伯の舞臺となり了れり。井上伯の如きも其の片顔を出し來れり。 著者

明治年間一種の人物

子爵鳥尾小彌太

傳へ聞く、鳥尾樞密顧問官は辭表を呈したりと。若し現今の政府をして政黨以外に超出する者たらしめば、而して現今の官吏は必ず政府の趣意を奉戴せざる可らざる者とすれば、鳥尾子爵の辭職は、今日に適當なりと云はんよりも、寧ろ其時機を失したりと云ふべし。何となれば彼が保守中正派を組織し、その首領となりて常に一種の運動を爲したるは、固より今日に始まりたる事にあらざればなり。

世或は鳥尾子爵を目するに、偏人奇物を以てする者あり。吾人と雖敢て彼を以て偏人奇物に非ずとは云はず。然れども彼は世人の想像するよりも、尙實才實力を有する一個の政治家なり。惜む可し、彼は未だ曾

て其實才實力を發揮するの時に遇はず、只その舉動は世人をして、イ
ト腥き好事の禪僧を以て目指せしむるに到れり、豈に慨せざるを得ん
や。

政治家は、政治社會の公有物なり、若し國民にして政治家を識らずん
ば、何を以てか政治を托するを得んや。吾人が今茲に鳥尾子爵を論究
するは、敢て彼を辯護せんとするにも非ず、又た殊更に排撃せんとす
るにも非ず、たゞ鳥尾得庵居士として、十餘年來我政界に出没し、世
人より一種の怪獸視せられたる子が人物を解剖して、以て我政治世界
の人民の參考に供せんと欲するのみ。

若し天然の才力をして、人物を比較するの尺度たらしめば、鳥尾子爵
の如きは、實に我邦政治家中最高の其一に位するを信ぜざらんと欲す
るも能はず、維新の事變に際しては、彼は僅かに二十内外の一書生な

二十歳
の俊才

強悍大驚
保利通大驚
久保利通大驚
之を大驚
使する能
能はず

り、而して其時に於て、彼が有爲の技倆は、既に先輩諸氏の爲に識認
せられたり。その節を持して和歌山藩の藩政を改革したるが如き、若
くは封土返還、廢藩置縣の議を首唱したるが如き、其眼孔の巨大にし
て、其手腕の靈敏なる、殆ど他の英物俊才をして、走り且僵れしむる
の勢ありき。而して當時に於てすら、彼は能く自家の獨自一己なる者
を守り、敢て容易に他人の爲に驅使せらるゝ事あらざりき。乃ち彼の
威權赫々、飛鳥を墮せし大久保利通氏と雖、容易に彼を驅使する能は
ざりしを見れば、彼が強悍驚愕の人物たる事は、最早多辯を俟たざる
べし。

吾人が知る所を以くすれば、大久保氏の爲に容られざる者、三人あり
き。曰く井上馨伯。曰て陸奥宗光氏。而して彼が如きも亦其の一人た
りと覺ゆ。是等の諸氏が大久保氏の爲に容られざるは、思ふに各特別

の理由あるべし、然れども其豺視狼顧以て他に狎れ近づく可からざるの險資怪質其一に居らすんばあらず。而して只この險資怪質の爲に、遂に彼をして濟世奇才屈二十年、十年心事附雲煙、と味氣なき悼辭を歌はしむるに至れり。

按ずるに彼は其初よりして、建設的の政治家よりも、批評的の政治家として卓出したるもの有りしならん。而して此十餘年間の逆境に立ちたる結果は、彼をして彌々其特出の才能を特出せしめ、恰も「たうち蟹」の如く、一方の足は寧ろ巨大に過ぎ、他方の足は寧ろ萎小に過ぎ、兩ながら其用を爲す能はざらしむるが如きに至らしめたり。人の不幸は、才を抱て才を用ゆる能はざるより大なるは莫し。此不幸の母は不幸の兒を産み、其才をして一方に發達せしめて、他方に發達せしめず、彼をして一の大なる不具者と爲らしめ、彼をして遂に批評的専門の政

「たうち蟹」

治家たらしめたり、是豈に惜むべきの至にあらずや。

斯の如く彼は十餘年來、多くは消極的の位置に立てり。彼の位置は彼をして、全く消極的の人物たらしめたり。若夫れ他を攻撃する點よりして云はば、誰か彼の鋒に衝るべきぞ。况や平生の才辯に加ふるに、七首の如き禪機の鋭尖なるを以てす、その機鋒縱横、毎に坐人を屈し、舌端の動く所、殆ど鬼上官の槍先の如く、万兵避易せざる莫きは、是れ固より怪しむに足らず。彼が現今に至る迄、眇々たる一身を以て、その黨援寡きに關せず、その興望少きに關せず、その他人よりは偏人奇物視せらるゝに關せず、その政治家の才能としては、世人より識認せられざるに關せず、常に彼が位置に於ては、其の牛耳を執り、在朝の政治家に對して、隱然一敵國の思あらしめたる者は、固より是あるが爲のみ。彼の器、大なりや、吾人之を知らず、然れども蟲に蜈蚣あ

り、寸餘のみ、而して能く巨鱗を蝨して之を殺す、魚に鯨あり、其形
大なるに非ず、然れども鯨鮪一たび之に觸るれば、亦た創痕を蒙むる
を免れず、彼は恰も政治家中の鯨なり、蜈蚣なり、小なりと雖鯨なり、
その鋭に觸るゝ時には、巨男硬漢も、忽ち其創痕を蒙むる。遠くより
之を想見する者は、未だ彼が畏るべきを知らず、近く彼に接し、其才
鋒を戦はしめたる者に於ては、未だ曾て彼を以て(若し敵とせば)畏る
べきの敵とせざる者少なし。彼は決して尋常一様の奇物偏人のみに止
まらざるなり、その實才實力、固より存す、唯その失意の位置に留ま
りたるが爲に、不幸にも只この才力、一種の批評的政治家として發達
し、常に他に創痕を蒙らしむるの爲に之を用ゐ、未だ建設的の爲に之を
用ゆる能はざらしむるのみ。豈唯た彼の不幸なるのみならんや、想ふ
に是れ國家の不幸なるのみ。

人は云ふ。彼は能く禪學に通せりと。抑も此禪學なる者は、如何なる
効用を彼に與へたる乎、既に禪學なる者の漠然として電を捕ゆるが如
きものたるを知らば、其結果の漠然として電を捕ゆるが如きも、亦た
怪しむに足らず。然れども吾人は之を以て、彼の不幸に歸せずんばあ
らず。彼は禪を學べり、之が爲に其禪家の所謂安心を得たる事もあら
ん、又た幾分が其才鋒を磨したる事も之れあらん。然れども彼の禪學
は、實に彼を殺したり、彼は之が爲に規則立ちたる事を好まず。彼は
之が爲に今日一事を爲し、明日一事を行ふ所の立憲政治家風を帶ず。
彼は之が爲に夏雲奇峰を湧すが如く、突然として起り、倏然として止
まるの舉動を爲す。彼は之れが爲に驚駭の枯葉を捲くが如く、一時に
猛然として起り、而して復た一時に滅然として已む。而して自ら以爲
らく、吾は宇宙の大を觀したり、人間何者ぞ、政治家何者ぞ。而し

て彼の達観は、果して彼をして西行法師たらしめたるかと云ふに然らず、彼は世界より半ば足を引き去らんと欲し、彼は世界へ半ば足を踏込まんと欲す。彼の身軀は恒に戦へり、進んで立憲政治家となり、その實用實才を發揮して、以て國民の望を繋ぐ能はず、退ひては禪僧となり雲無心出岫、鳥倦飛還、故林の高致を帯る能はず。其結果として人目に反射するものは、孰れの政府に在りても不平家たり、而して孰れの政府に在りても其祿を食めり、是豈に彼の爲に祝すべき事ならんや。人生識字憂患初と、彼が禪學を修めたるも、寧ろ此憂患の初にあらざる無きを知らん哉。

彼と親善なる某英才、曾て吾人に告て曰く、若し鳥尾をして學問せしめざらんには、彼尙ほ用ゆべき才能多かりしに、只彼が學問の爲に、彼を一棒に殺し了れりと。學問とは恐らく禪學の事ならん。而して其

禪學は
彼を
一守
正派
の中
組派
を
組織
せし
む

政治家
の先づ
第一の
世の中
に
71

結果として彰はるゝ者は、只この禪學の爲に山寺の和尚、若くは古神主、窮經を抱ける儒生等を彼に吸引せしめて、一種の保守中正派を組織せしめたる是のみ。而して是豈に彼の重をなすに足らんや、若し彼が率ゆる所の者に由りて之を見れば、彼も亦是れ一個の固陋漢のみ。世人が彼を誤認して偏人奇物と爲すは、世人の眼識明かならざるの爲とは云へ、亦た彼の罪に是れ由るのみ。語に曰くその侶にする所を以て其人を觀よと、若し此語を適用する時は、彼は實に政治家として、半錢だも價值なきなり。吾人は寧ろ世人の彼を見るよりも彼を重く見る、何となれば、彼は彼が俱にする人よりも一種卓出したる英物なることを深く信すればなり。政治家として世に立つ者は、必ず世の中心力、何の點に存するかを識破し、自ら進んで其中に投するか、或は其中心力をして進んで己に來

り投せしむ。その作用がならずと雖、未だ曾て是に出ずんばあらず。
今や我邦の中心力果して何に存する耶。吾人は彼が今日に於て保守論
を唱へ、恰も塗壁に馬を乗り懸んとするを見て、其見識の甚た卑きに
驚嘆せすんばあらず。彼抑も何の見る所ありて斯の如き事を爲したる
乎、或は少しも見る所なき乎、見る所なくして動くも亦迂ならずや。
然りと雖吾人は漫に彼が保守論を主張するを咎むる能はず、何となれ
ば世の英才にして、往々保守論を主張する者あり、是れ故なきに非ず。
例せば第十八世紀に於て、ポリンブローックの如き、第十九世紀に於
て、ヂスレリーの如き、共に保守黨の勇將と爲れり、彼等が保守黨の
勇將と爲るや、故なきに非ず、當時の保守黨は其に一國に於て、一大
部分の勢力を占めたり、而して其勢力は啞の勢力なり、何人も之が爲
に發言する者なし、其勢力は替の勢力なり、何人も之を指揮する者な

し、而して彼の機敏なる政治家は、忽ち之に投じて其案内者となり、
其發言者となり、直ちに其勢力に踞して以て、其位を得、その思ふ所
を行へり。政治家の技倆として保守論を吐く、必ずしも咎むべきに非
ず。唯吾人が疑ふべきは、鳥尾子爵の所謂保守中正派なる者は、果し
て斯の如き者なるや否やの一點に存す。
今や保守中正派を組織する所の要素は如何、多辯を俟たず僧侶、神官、
儒者の三階級に存するを知るべし。而して其僧侶は、真宗——僧侶の
中に最も勢力ある所の真宗——を除ひての僧侶なり。其神官は、神官
中にて最も勢力ある皇典講究所派を除ひての神官なり。其儒者は、儒者
中にて最も勢力ある、隠然谷將軍を尊奉する所の者を除ひての儒者な
り。僧侶、神官、儒生、共に今日の社會に於て頼母敷要素に非ず、而して
此要素を味方とし、而かも其要素中にて最も重要なる部分を引き去り

たる者を味方とす。語を切にして云へば、我邦に於て薄弱なる要素中の最薄弱なる者を占領して、自ら之が長と爲る。鳥尾子如何に伏魔製龍の活機を有する者なりと雖、之を率めて何事か爲さんとする。思ふに彼のポーリンプロクスの如きは、三年の間權勢を得、而して一たび其權勢を失ひ、三十五年間他の權勢者の傍に在りて、之が攻撃者となり、批評者となり、懊惱懺悔交々至り、遂に其天然の才力を發揮し畢らずして死せり。吾人は鳥尾子爵の爲に之を惜む、何となれば彼はポーリンプロクスの盛運を學ぶ能はずして、只その不幸を學ばんとするを見ればなり。彼は反動の潮流に立ち、反動の潮流に養はれ、而して反動の爲に働き、亦た反動の爲に畢らんとす、而して自ら曰く、夜光の璧之を暗に投すれば人をして劍を按せしむと、(王法論の跋を參照せよ)。是寧ろ彼の爲に悲むべきの至にあらずや。

新島先生没後の同志社

左の一篇は余か明治二十三年三月三十日の夜、同志社公堂に於て演説したる筆記の大意なり。當時の演説たる、情般んに、意迫り、殆んど余自ら其言ふたる所を忘れたり、本文の如きは只その大綱に過ぎず。

徳富猪一郎誌

豫てより明治二十三年は、國家大變動の時と覺悟し居れり、而して曷ぞ料らん、亦同志社大變動の歲ならんとは。而して此變動を促したる者は何ぞや、新島先生の我等を棄て、昇天せられたる事是なり。同志社の望は先生に頼りて繋かれたり。之を外にしては天下萬人の眼、一に先生に向て注ぎ、之を内にしては同志社諸生の心、一に先生に向て注ぐ、同志社の望は實に先生に頼りて繋かれたり。而して今や先生の

同志社

創立せんとする大學未だ成らざるの時に於て、死の手は先生を導き去れり。諸君は如何にせんとする乎、如何にして今日に處せんとする乎。同志社は社員同志社に非ず、教師の同志社に非ず、卒業生の同志社に非ず、生徒の同志社に非ず、社員も、教師も、卒業生も、生徒も、悉皆な此同志社を組織するの一分子にして、之を合して、則ち同志社と云ふなり。今や我同志社は、その案内者を喪へり、今日よりしては、同志社自ら同志社の運動を爲さざる可らず、而して如何にして運動せんか。只須く先生の志を奉じ、先生の精神を體し、以て自家十二分の力を奮ひ、誠を盡し、精神を傾て、以て其の涯分を瘞すに在るのみ。先生の志す所は、吾人不肖と雖、聊かその教を聽くことを得たり。吾人は今悉く之を此處に明言する能はず、然れども品行キヤラクダの二字は、屢々先生の我々に向て面命したる言葉にして、吾人は今日に至る迄、之を回

品行

想する時には、獅子の吼るを聞くが如く思ふなり。

品行とは何ぞや。酒を飲まぬ事か、烟草を喫せぬ事か、應對周旋、禮節に中る事か、否斯の如きのみ止まらず。先生は常に口にせり、今先生の言を假りて之をいへば、品行ある人とは「キツイ」人、「ゴツイ」人の事にして、斯る人を出さんとするは、即ち先生の同志社を設立したる大目的、大眼目に外ならざるを信ず。

先生は國家を忘却したるの人に非ず、國家を救はんとしたるの人なり。而して其の之を救はんとするや、敢て他に奇術を索めず、直ちに之を一個人の上より救はんと欲し、而して其一個人は、之を其品行の上より救はんと欲したる者なり。乃ち先生の意を茲に演繹すれば。一國の命脈は國風に依て維持し、國風は個人の品行に依て維持し、個人の品行は、その理想を高尙にし、その良心を疑かざる堅實真摯の志に依て

「キツイ」人、「ゴツイ」人

先生念はるる人
國家を救はるる人
に在る

維持する事を知るなり。今試みに先生が天下に告白せられたる同志社
大學設立の趣旨に由りて之を見るも、即ち左の如き言あり。

故に吾人は敢て吾人が赤心を開陳して、全天下に訴へ全國民の力を藉り、以て吾人年來の宿
志を達せんと欲す、勿論此の大學よりしては、或は政黨に加入する者もあらん、或は農工商
の業に従事する者もあらん、或は宗教の爲めに働く者もあらん、或は學者となる者もあら
ん、官吏となる者もあらん、其成就する所の者は、千差萬別にして、敢て豫め定む可からず
と雖も、是等の人々は皆な一國の精神となり、元氣となり、柱石となる所の人々にして、
即ち是等の人々を養成するは、實に同志社大學を設立する所以の目的なりとす、
一國を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、實に一國を組織する教育あり、智識あり、
品行ある人民の力に據らざる可からず、是等の人民は一國の良心とも謂ふ可き人々なり、
而して吾人は即ち此の一國の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す、吾人が目的とする
所實に斯くの如し、睦きに曰く、一年の謀とは穀を植ゆるに在り、十年の謀とは木を植ゆ
るに在り、百年の謀とは人を植ゆるに在り、蓋し我が大學設立の如きは實に一國百年の

大計よりして止む可からざる事業なり、

其目的たるや、推して知るべきのみ。乃ち之を切言すれば、先生の如
き人物を造るは、恰も先生の志にて有りしなり。先生は高く自ら標榜
したる人に非ず、その恭謙自から下る敢て人に向て己を學べと云ふが
如き言を爲さず。然れども先生は空論家に非ず、口に言ふ所、躬先づ
之を行ひ、人に望む所、躬自ら之を踐む。先生が斯の如き人物を造ら
んと欲したるを見れば、先生自ら斯の如き人物たるに相違なきを知
るなり。然らば則先生の如き人物を造り出さんとするは、則先生の素
志なりと云ふも、固より過言に非ず。而して今日は正に同志社——社
員、教師、卒業生、生徒——が此品行を有するや否やを試験するの一
大危機に迫り來れり。南海の颶風、北洋の猛濤に非ざれば、舟師の技倆
を知る能はず、鵬越、檀浦に非ざれば、勇士の面目を驗するに足らず、

先生の如き人物を出すは、先生素の如きなり

渾て是
渾て是
渾て是
渾て是

同化力
先生力
腦裡伏
埋るる

今日は當に我が同志社が、膽薄く、骨弱く、其案内者を喪ふて逡巡、畏縮、倉皇、狼狽、天下の物笑となるか、抑も亦た命を天に任せ、肅々整々、先生が指定したる目的に向て、猛志硬行、以て歩武を進むべき乎、二者必ず其一に處らざる可らざるの時となれり。

今日は先生を説明するの時に非ず、又た評論するの時に非ず。然れども今若し試みに先生品行中の重なる者を舉れば、只一言にして止まん。先生の人に接する渾て是れ愛なり、先生のものに對する、渾て是れ精神なり（エノルツァー）。

昔し朱光庭程明道を見る、歸りて人に謂て曰く、光庭春風の中に在て坐す一箇月と。吾人が先生に就て云はんと欲する所、幾ど斯の如きのみ。同化力は先生の腦裡に埋伏したる一大潜勢力なりしなり。凡そ先生の前に出る、愚人も、悪人も、凡人も、俗物も、悉く先生の爲

一大潜
勢力

に同化せられ、學者は其學問に誇るを忘れ、辯者は其辯舌を銜ふを忘れ、狡僞者も其誠を獻し、暴慢者も其の恭を致し、婦孺老幼は其婦孺老幼たるを忘れ、幾ど躬自ら先生の如く、否幾ど先生と一體たらしめんとせり。若それ海中の奔濤も、先生の言を聽くべき耳あらば、忽ち平然たると有らん。若それ山上の頑石も、先生を見るの目あらば、必ず温乎として其主角を磨し去らん。況んやその良心を具へたる人類に於てをや。然りと雖吾人は今此事を詳説するの暇なし。

若夫れ先生の物に對するに至りては、一に是れ精神のみ。此點より觀察すれば、先生の全身渾て是れ精神と云はざる可からず。昔はオーコンナル嘗てエノアデに語て曰く、政治家の資格は重複するに在り、即ちその言ふ所は幾度も之れを繰返し、その反響の來る迄繰返すに在り。先生は實に斯の如き人なりし、その日本に還るや、日本は之を精

神○的○よ○り○す○れ○ば○、○死○と○荒○々○漠○々○の○原○野○な○り○し○。○先○生○は○叫○べ○り○、○應○ず○る○人○
な○し○。○先○生○は○叫○べ○り○、○應○ず○る○人○な○し○。○然○れ○ど○も○先○生○は○遂○に○叫○ん○で○、○天○
外○の○反○響○を○喚○ひ○起○せ○り○、○而○し○て○反○響○の○來○る○も○尙○之○れ○に○満○足○せ○す○し○て○叫○
べ○り○。

明治十七年來、死は常に先生と伴へり。先生は死と同居しをれり、然れども先生之が爲に、少しも其志を屈せざるなり。先生は敢て死後の計を爲さず、只生前の務を畢らんと欲せり。その二十一年東京に出で、大學の事に奔走したるが如き、吾人親しく先生と面して、實に其の先生の精神の、死だも尙奪ふ能はざるを知れり。之を醫師に問ふ、曰く先生は殆ど死に近づけりと。而して親しく先生に面すれば、先生は恰かも死の傍に在るを知らざる者の如し。否その氣息奄々たる病軀中には殆ど山をも動かすべき大精神充實し、之に對する時には先生の

六年以來先生自ら死を伴へるを知る

精神は殆ど十年、百年、千年、億萬年をも永續せんかと思はるゝ程の心強き感を傍人に分與したり。而して余頃る先生當時の旅行日記を搜りて、始めて當時既に先生の死を決したるを知る。其の半生の事業を顧りみ、且つ嘆息し、且つ安心し、一哭、一笑、從容として命を待つ。の意は、其の字句の外に横溢せんとす。此によりて考れば死先生を迎ふるの前に於て、先生は早くも死を待ち居たりしなり。而して其再び京都に歸りたる時には、恰も「已分天涯爲死別、寧知意外得生還」の情油然而たるを想見せずんはあらず。吾人の冷情なる之れを察せず、只先生の精神の爲に鼓動せられ、其傍らに五時間乃至十時間も談笑し、更に先生の病苦の其身に在るを忘れたるが如き、今に至りて之を思へば、殆ど一大慟哭せざらんと欲するも能はざるなり。浮田君は先生を評して、劉先主と云へり、是實に知言と云ふべし。然れども先生は玄

徳と一の相違あり、玄德は諸葛孔明を有す、而して先生は有せず、否先生自ら孔明の爲すべき事すらも爲せり。是實に先生の爲に大なる不幸にして、且つ是が爲に先生の死に垂んとして、猶同志社大學の爲に盡瘁したるを察するに餘りあるべし。

苟も三國史を讀む者は知るべし、孔明一たび祁山に出づ、孔明二たび祁山に出づ、而して遂に六たび祁山に出で、忽ち「孔明秋風五丈原」に至るを、先生の事即ち之に類す。その死に垂んとするの病軀を抱て、東西に奔走し、殊に明治二十二年の如きは、先生の大患たる心臓病の仇敵とも云ふべき盪寒の時に向て東上し、この烈寒を對手に上州に入り、更に進んで福島に到らんとし、傍人の諫止するが爲に、僅に福島に行くを思止まり、上州よりして再び東京に歸れり。若し先生をして行く處に往かしめば、先生は其骨を白川關外に埋めしならん。而してその

孔明秋風五丈原

大磯に在るや、未だ曾て一日も其平生の志を忘れず、其肉體は病を養ふが爲めに安坐するも、其心は日本の全州に往來し、或は書東を發して後進生を奨勵し、或は地圖を按じて傳道の方策を講じ、而して専ら本年大學の運動を計畫しつゝ在りしに、其志未だ遂ずして終に永眠に就けり。是に由りて考ふれば先生の一生涯は、恰も旅客が迢々たる千山萬水を一枝の筈に仗りて來往するが如し。而して必ずしも疾驅するに非ず、必ずしも休息するに非ず、日又た日、月又た月、年又た年、行々重行々、遂に力盡きて路傍に死せるのみ。先生死に垂んとして曰く、蒲團の上に死するは男兒一生の恨事なりと。然れども先生は蒲團の上にて死したるに非ず、實に其職分の途上に於て、肉體の機關を消磨して、是に斃れたるのみ。我同志社——社員、教師、卒業生、生徒——の運動、亦斯の如くせざる可からず。吾人が先生を學ぶ、亦茲に

乞ふ吾人の歩ん

在るのみ。
今日は實に同志社危急存亡の一時なり。之を外にしては、天下の望は先生と俱に或は散せんとす、之を内にしては生徒の心、或は先生と俱に離れんとす。而して未だ先生に代りて、此大機關を運轉するの人なく、此大團體を指揮するの人なし。殊に大學の事業の如きは、業未だ成ならずして、其創立者を喪ひ、厄中の最厄中に陥れり、今日は寸時も遲疑するの時に非ず。斯波爾多に一見あり、軍に出るに際して武器を乞ふ、其父與ふるに短劍を以てす、見その短なるを嘆す、父曰く、汝の劍若し短ならば乞ふ汝の一步を加へて此を長くせよと、今日の事たる只是あるのみ。吾人が天下に於ける信用固より薄し、吾人が力固より少し、吾人自ら顧みて茫然たるものあり、然れども今日の事只是あるのみ。若し吾人が劍短ならば、乞ふ吾人の一步を轉せん。今日は同志

若王寺
山頭萬
世不滅
柱の火

社の爲に、同志社大學の爲に、苟も先生の教を奉ずる者は、先生を摸範とし、吾を忘れ、私を忘れ、凡ての行懸りを忘れて、一步を轉するの一大時節なり。此時節を外にして復た他日なし。若夫れ是時に於て、右を視、左を顧み、姑息因循、以て一日を送らば、同志社は長く野草の裡に埋没し、他人の蹂躪する所とならん、人の品行は永久不滅の者なり、吾人が平生靈魂の不朽を信ずるは、夫れ何の要ぞ。之を思へば若王寺山(新島先生の墳墓)の絶頂には、萬丈の火柱あり、我同志社を睨み居るが如きを覺ふ。苟も之を覺ふ、先生死する猶生るが如し。若夫れ吾人にして互に其心を同ふして、其力を戮せ、社員も、教師も、卒業生も、生徒も各その全力を擧げ、その全身を獻げ、以て此一大機關を運動せしめ、以て先生の指定したる道路を濶歩し、而してその精神盡き、力盡き、先生の如く職分の道路に死

せば、吾人亦た幸に非ずや。吾人亦た大丈夫の志に負かざる者に非ずや。



文字の教を讀む

文學者としての福澤諭吉君

三月の末西京滞在の節、一日某氏の書齋にて、薄き冊子の目に着くあり、題して文字之教附録と云ふ、把て之を讀む、即ち福澤君の著述なり。其文、福澤流の特色を圓滿に發揮し、感ずべきもの甚だ多し。頃

所謂文字之教
ろ京橋近傍の古書肆を探り、所謂文字之教なるものを購ふを得たり。其書三冊、其一を「第一文字之教」と云ひ、其二を「第二文字之教」と云ひ、附録は即ち其三冊に當る。紙數通例の半紙にして、每冊二十枚乃至三十枚、而して其行數粗く、其字甚だ大なり。第一第二は、初學讀本にして第一教、第二教と分ち、而して每教通常の活字にすれば、初號以上の字即ち國民新聞第四面の題字よりも一層大なる字を以て單

此小冊子に看
易に看
過すべ
る者あり

を記載し、而して之に二號活字程の文字を以て、その單語に由りて組
織せられたる長短の文句を挿めり。而して附録は行書にして、その文
字分つに一段、二段を以てし、毎段の仕組、前者と異なる無く、たゞ
異なる所は、字跡の行書にてあると、又その手紙の文句に止まるとの
み。要するに是れ片々たる小冊子のみ。
然りと雖此小冊子は、吾人に於ては、容易に看過すべからざる者あり。
故紙に書きたる一片紙と雖、千萬圓の預り證文ならば、之を大切に爲
すべき理由あらん。斯書の如きは、必ずしも各人の書室に備へ置くべ
き程のものにも非ず、然れども斯書は實に、文學者として明治年間の
珍らしき人物——福澤論吉君——を説明するに於て大なる案内者と爲
るべし。

新日本文明の、福澤君に負ふ所のもの多きは、既に世人の識認したる

福澤君は
經世學
に學し
て文を
兼る者
也

所、今更ら繰返す迄もなし。日本文學の福澤君に負ふ所に至りては、世
人或は之を認めたる者あり、然れどもその多數は、曾て之に頓着せざ
るもの、如し。其の然る所以のものは何ぞや、世人が只福澤君を經世
家——福澤君の常に自ら好んで稱する——として之を見、未だ文學者
として之れを見るもの鮮きに由るのみ。されど經世家として、必ずしも
文學者ならざるに非ず、文學者として、必ずしも經世家たらざるに非ず。
否、文は道を載るの器なり、經世家が天下を導くに於て、欠く可から
ざるの利器なり。文士必ずしも悉く經世家に非ざれども、經世家往々
文士たる所以のもの、固より是に存す。而して本書の如きは、實に福
澤君を文學者として説明するに於て、大なる案内を與ふる者なり。
世の福澤君を識らざる者は、其文章の平易圓滑にして人の心脾に入る
易きを見て、君は文章の事には、無頓着ならんと思ふ者あるべし。是恰

も幼學便覽的の詩人か、難字俗句の博覽會とも云ふべき韓退之の詩を
 觀て、文學に心ある人の詩と做し、白樂天の詩を觀て、是恰も出放題
 に口を衝て出で來りたるものならんと速了するが如し。韓退之未だ必
 すしも文字に細心ならざるに非ず、然れども白樂天の如きは、その細
 心なるの點に於て、退之に勝るも劣る所なけん。傳へ云ふ樂天は、一
 詩成る毎に之を誦して老嫗に聽かしむ、彼れ解せざれば屢々之れを改
 め、解するに至りて乃ち息むと。福澤君の文章に於ける、恐くは亦斯
 の如くならん、而して果して斯の如くなる事を説明し得たるは、この
 文字之教に於て明かなりぞす。

福澤君は、實に新日本文學改革の喇叭手たりしなり。若し平民的文學
 ——吾人に斯の如き句を用ゆるを許さば——の盛運を啓きたる者は、
 誰ぞと問はれ、吾人は猶豫なく指を君に屈せざるを得ず。

抑も此文字之教なる者は、その表紙に記するに、明治六年十一月福澤
 氏板とあり、されば此書の出版せられたるは、云ふ迄もなく、羅馬字
 會、假名の字會、言文一致躰等の興る前にありしなり。而して今その
 端書に掲げたるものを讀むに、左の如し。

- 一 日本に假名の文字ありながら漢字を交へ用るは甚だ不都合なれども往古よりの仕來り
 にて全國日用の書に皆漢字を用るの風と爲りたれば今俄にこれを廢せんとするも亦不都合
 なり今日の處にては不都合と不都合と持合にて不都合ながら用を便するの有様なるゆへ漢
 字を全く廢するの説は願ふ可くして俄に行はれ難きとなり此説を行はんとするには時節を
 待つより外に手段なき可し
- 一 時節を待つて唯手を空ふして待つ可きにも非されば今より次第に漢字を廢するの用
 意專一なる可し其用意とは文章を書くに。むづかしい漢字をば成る丈け用ひざるやう心掛
 るとなり。むづかしい字をさへ用ひざれば漢字の數は二千が三千にて澤山なる可し此書三
 冊に漢字を用ひたる言葉の數。僅に千に足らざれども一と通りの用便には差支なし。これ

君が平民的文唱
民唱の明
學は明
道は明
治は明
否に在り
慶應に在り
間應に在り

に由て考れば漢字を交へ用ゐるまで左まで學者の骨折にもあらず唯古の儒者流儀に倣て妄りに。雖も字を用ひざるやう心掛ること緊要なるのみ、故さらしに雖も文を好み其稽古のために。漢籍の素讀なきを以て子供を啓るは。無益の戯と云て可なり。
されば君が眼光は、既に明治六年の當時に在りて、平易質實、何人も之を讀む可く、讀者は何人も之を解し得可き平民的の文學に注着したるを知る可し。豈唯た當時に於てのみならんや、慶應年間「西洋事情」の第一冊を出版するの時に於て、君は既に或人が、漢學先生に字句の添削を爲さしめよと懇懇したるを謝絶したるの言葉を例言中に置けり。若し遡りて之を云はば、慶應年間に既に平民的の文學を主張し居たる者と云ふべし。維新革命の前後に於て、所謂る書生言葉なる破れ漢語の流行したるは、恰も歐洲の中古に於て、訛りの羅句語流行したるが如き、潮先に立て、斯る新意見を立てたるは、以て其の巨眼の炯々たるを見る可し。

此冊子の
程君の
文學者
たる者
の特色
はしる
はしる
無し

斯の如く此小冊子は、君が文學者として我新日本の時代に位置を占むべき事、及び君が文學上に關する意見の、早くも一世に特出したる事、又た特出したるのみならず、その意見を實踐したる事等を知るに於て充分なる證明を與るのみならず、又た文學者として君の特色を知るを得べし。何となれば此書は小冊子と雖、此の書は君が文學上の技倆を彰はす爲に著述したるものに非ずと雖、又た或は君が充分骨を折りたる作に非ずと雖、恐らくは此の冊子程、文學者として君の特色を彰はしたるものは無かるべし。何となれば此文字は、天真爛漫として實に不用意を以て之を獲たればなり。
君が文學者としての特色は、多端なり。吾人今悉く之を精密に辨ずるの餘幅なし、其一斑を擧んに。
(第一) その措辭警策ありて。毎に一種の氣魄を吐けり。必ずしも

名言なるに非ず、必ずしも意味深長なるに非ず、必ずしも譎然たる仁者の言に非ず、必ずしも滑々なる俗人の言に非ず、たゞ云ふに云はれざる一種の警策ありて、尋常の文句も君が口よりすれば、忽ち警語となりて異味を讀者に與ふるなり。例せば第一冊第三十二教中に、

誠 偽 虚言 盜賊 卵

四角 言葉 始

の單語を題し、次に左の文句あり

天を高しと云ふは賊なり○卵を四角なりと云ふは偽なり○偽を云ふ言葉は虚言なり○虚言は盜賊の始なり

是れ更に譯もたわいも無き言なれども、一たび君が口より出れば、何となく警策あるが如し。其他「良キ子供ハ書物ヲ買テ讀ミ惡キ男ハ酒ヲ買テ飲ム」とあるが如き、實に好個の警語と云はざる可からず。而

して其の警策を生ずる所以を察するに、明快なるに在り、而して其の明快なるは一刀直入其要點を穿つにあり。約束ヲ違フルヲ違約ト云フ違約ハ虚言ナリ」と云ふか如き、恰も指先を目に突き込むか如し。
(第二) その直截なるに在り。直截とは例を引くの手近きなり、譬を取るの手近きなり、趣向を索むるの手近きなり、議論をするの手近きなり。都て其の手近くして如何なる愚人と雖、如何なる鈍物と雖、之を聽て解せざる可からず、之を解して手の舞ひ足の踏む所を知らざるに至らしむるを云ふ。

その斯の如き所以のものは何ぞや。蓋し君の脳髓は常に、實体的に働きて、抽象的に働かず、天とか、宇宙とか、理とか、道とか云ふが如き心理学上の用語は、君に於て只是れ空の最も空なる者にして、毎に自ら理想を爲すにも、實物を目の前に扣へ置き、人に向て之を解くに

も亦實物を目の前に扣へ置かしむるが如き、それ唯斯の如く實體的なり。而して其實體も、敢て間遠き物を須るが如き、最も人の耳目に入り易き物を用ゆ、是れ其の直截なる所以なり。例せば附録第二十二段

一條 町内 寄合 不取敢 戸長

懸意 今般 街道 殺害 始末

於て 残念 證據 多分 所爲

推察

此度の二條に付ては村方一同大に心配仕候。町内の者共寄合いたし不取敢戸長迄届け置候。與二兵衛は私も兼て懸意罷在何事に寄らす同人へ相談致候位之處今般山崎の街道にて殺害に逢ひ候始末私に於ても誠に残念に御座候右殺害に付未だ體なる證據は無之候得共多分定九郎の所爲と推察致し候

吾人は必ずしも之を以て、書牘文の好摸範と云ふに非ず、然れども只君

人の爲す知る能はざる探る所以を自家材料に供す

非常の事を通の常事にするに云ふ、奇想の特色の三 99

が文字の手近きを證するのひと爲すのみ。その某氏某處と謂はすして實體的に人と場所を指し、然も其の人は與一兵衛、定九郎にして、其の場所は山崎街道と云ふ、請ふ思へ天下何人か與一兵衛、定九郎を知らざる者あらんや。人の悉く知る所にして、又た人の敢て之を自家藥籠中の物となす能はざるものをは、悉く探て以て其材料に供す、君が文章の他と面目を異にする、其一は即ち茲に在りとす。而して其大なる勢力を有する所以、亦茲にあらすとせんや。

(第三) 人、或は君の文を觀て、奇想天外より落ると云ふ、然れども是れ必ずしも天外より來るに非ず。元來奇てふ者は通常の事を非常に云做すにも限らず、非常の事を非常に云做すにも限らず、又た非常の事を通常に云做すとも、其のひと云はざる可からず。若し君が文章を奇なりと云は、その奇なる所以は、即ち非常の事を通常に云做す

毎に釣合をたすを合つてた合毎
の四特有釣し有釣

に在るのみ。左に掲ぐるが如きは即その一例なり、附録第二十六段に
一 かの長き針金傳信機を申し遠國へ文通之合圖いたし候仕掛にて皆様方之御便利を存し
色々心配之上出来候處右を日本と外國との界なきに相立候ては誠に迷惑至極に御座候
一 右等之義に付一揆を起し候ては日本國中之損亡に相成其割前は御同前人別之あたまたに
掛り候事ゆへ一揆之御相談は皆様方之學問御上達迄暫く御見合被下度深く奉願候也
一 揆とは極めて非常にして容易ならぬ事なり、而して其相談をば學業
成就迄見合せよと云ふが如き、何ぞ夫れ落付きたるや。人之を讀んで
忽ち異常の感を生ず凡て君の文章の卓越する所以、其議論の陳套なら
ざる所以、職として茲に在り。

(第四) 君が文章の全躰を貫くものは、毎に其釣合を有つにあらざ
して、不釣合を有つに在り。極めて嚴肅なるものを、極めて可笑しき
ものと比較し、極めて大なるものを以て、極めて小なるものと比較し、
極めて縁遠きものを以て、極めて縁近きものと比較す、その楠公を權

介と相對し、娼妓を以て濁世の聖人と云ひたるが如き、則ち其一例な
り。唯この手段あり、是を以て縱論横説、其言光怪陸離、愈々出で、
愈々人を驚かし、愈々説て愈々人を喜ばしむ。然り而して君の妙は、
小なる事を大に云ふにあらざして、大なる事を小に云ふに在り、近き
事を遠く云ふにあらざして、遠き事を近く云ふにあり、易き事を難く
云ふにあらざして、難き事を易く云ふに在り。苟も君の文を讀む時に
は、金星木星の話も、猶ほ上野公園地の話を聞くが如く、六ヶ
敷經世上の理窟を聴くも、尋常の茶話を聴くが如く、其言ふ所天下に
難事なく、人間萬事皆な平々談笑の中に之を行ふ可く、天地間幾ど人
間の力にて出来ぬと云ふ事は無き様に思はしむるに至るなり。
(第五) 又た君が文章の特色の一と云ふべきは、毎に死中活を覓む
るに在り。語を詳にして之を云は、撒脱に在り。その議論重圍の裡

に陥る時に於て、忽ち一條の活路を看出し、斬破りて出て、而して更に一層を進むるに在り。例せば附録二十五段に

- 一 血税とは人の血を取ることにあらず運上に血を取り集め候ても其始末に困り可申
- 一 戸籍を調べ人別を改め候は親を外國へ渡すためにあらず假令ひ渡し候とも無學文盲役

若し尋常の操觚者ならば、たゞ血を取る筈なも、娘を外國に渡す筈なしと、斯の如く獨斷的に断定すべき筈なれども。取集めても云々と云ひ、渡しても云々と云ふが如き、更に一層を進め、人目を快醒ならしむるは、斯翁慣家の調と知るべし。獨り文法のみならず、君が論法亦然り。常に如何なる場合に於ても、議論の透徹なる所以、又た茲に在るを知るべし。豈に論法のみならんや、其眼識亦然るなり。

以上の如きは、君の特色に相違なしと雖も、若し仔細に之れを學習せ

は、或は其の一片を學ぶを得可し。然れども以下陳る所に到りては、天機の發する所、性靈の凝る所、所謂る突天蟠地獨歩の伎倆と云はざる可らざるものあり。獨歩の伎倆とは何ぞや。其文諧謔なり、頓智なり、諷刺なり、嘲笑なり、渾て此等のものを含蓄する事是なり。殊に此中にて最も多きは、嘲笑なり。

君が有する笑の分子なる者は、必ずしも一種の穩和にして面白き、無心、無罪に、たゞ人を娛ませしめ、人を笑はしむるものに非ず、又た整すが如く、突くが如き、毒あり、煽あるものに非ず、眞綿の中に針を立るが如きにあらず、口に接吻して背より刺すか如きにもあらず、胡蝶の飛んで顔を摩づるが如きものにも非ず、又た毒蛇の來りて足を噛むが如きものにも非ず、蜜を嘗むるが如きの甘きに非ず、芥子を嘗む

るが如きの辛きにも非ず、其妙所は正に甘辛の間に在りて、幾ど其調合を得たり。若し強て云は、辛きと稍、甘きに過たるのみ。其例の如きは附録第十六段

私儀此度親類相談の上學問のため東京へ飛出同處淨世小路堅板水四郎君の周旋を以て明般町一丁目有名堂無實先生方へ入塾致候處中々盛なる學校にて塾生の數三萬三千三百三十三名當時雇入の外國教師は英人「シユウメイカル」來人「セイロル」の兩人日本教師は洞尾福太郎吳摩嘉七郎摺子義一郎先生等七八名にて日々教授被致候

若夫れ吾人が點を附したる文句をして、別字を填しめば尋常一様にして、別に何程の感も生ぜざるべし。只この塾生の數を云へば、三萬三千三百三十三名と云ひ、殆ど人をして三十三間堂の佛の數を聯想せしめ、先生の名を云へば洞尾福太郎と云ひ、吳摩嘉七郎と云ひ、殆ど人をして誇張者瞞着者の聯感を催さしむるに在るのみ。而して此特色、殊に最後の嘲笑的特色は、實に舊日本破壊、新日本

建設の當時に於て、迷溺せる人種を快醒解悟せしむるに於て、實に一大利器たりしに相違なし。凡そ斯る場合に於ては、萬斛の涙を流して之を説諭するよりも、一掬の嘲笑を以て之を笑倒するを以て、寧ろその効用多しとす。附録卷末の一文の如き是なり。

二十七段 此一處は惡文の例なり

僅數年前より宇内の形勢を洞察し國元にて新に不毛の地を開拓し専ら農を勤るの目的にて桑菜等も植付候處何分にも財本に乏しくして遂に其事を果さず尙又小理鐵山器械の事に付見込有之再三縣廳へ建白致し候得共折節長官の面々轉任の際に當り候の建築も採用不相成爾後坂地に遊び同處の景況を察するに其地勢正しく皇國の中央に位し人戸稠密市街壯麗舟楫の利、陸運の便、四通八達、來往自在、左には京師の富貴あり右には神戸の繁榮ありて相共に其羽翼を爲し凡そ天下の富商大賈争て此地に輻湊せざる者なし全國の富有十分の八九は大坂にありと云ふも亦溢言に非ず既に地の利を占め又金の權あり商法の爲めには實に海内無比の要地と云ふ可きなり唯如何せん不開化の商人等私利を營むに汲々として大業を企

つるを知らず蠢爾として奮物を墨守するのみ僕、これを傍觀するに忍びず乃ち一策を案し今此大都會に於て盛に航海の術を開き貿易の商社を建て今其方法は専ら新奇を求て他の糟粕を管めず人に先て人を制するを旨とし茶、絹糸、等の如き尋常の物品は既に己に煉腐に屬したれば斷然これを取扱ふとなくして更に世間未發の貿易品に眼を著し皇國製造の武具、馬具、膳碗、火鉢、行燈、壺、建具、下駄、雪踏、草履、草鞋、夜具、蒲團、足袋、頭巾、其外一切古着の類、婦人服飾の品は櫛笄、元結、髮附の類、食料は味噌、梅干、澤庵の類を撰び是等の物品は人間普通の需用品にて世の貿易家未だ之を輸出するを知らざるものなれば今、人に先て此貿易の權を我商社の手に握り皇國內の開港場へ運輸するは勿論或は上海、香港へも往來し遠くは西洋諸港に至り五大洲の人民と廣く貿易の道を開くとあらば皇國の商法更に一面目を改め三年を出すして英亞諸國の商社を壓倒し我皇國をして世界第一の富國たらしめ皇國既に富み皇兵も亦從て強盛を致し皇道以て振ひ皇法以て立ち皇威は耀き皇名は轟き五洲の人民皇風に靡ひて皇德に化せんことを望に指すか如し斯の如くなれば則ち上は以て皇恩萬分の一を報じ下は以て皇民福慶の基礎を開くを得んこ獨り自から心に決し東走西馳百方説諭を費すこ雖とも嗚呼天なる哉大坂の町人豈一人として僕が策に従

ふ者なし
右の次第にて徒に三四年の星霜を過ぎ目今に至ては一身活計の方法もなく春來舊友の家に食客相成居候處内實は同家の細君客を待遇するに禮を失し僕竊に憤懣に堪へずされども今去らんを欲して他に依頼す可き處もなく進退惟谷の場合に陥り當惑の次第に候何卒右の情實懇然被思召可然官途へ御推舉彼下度實は奏任以上を企望致し候得共差向の處窮鳥枝を撰ぶに違あらざれば抱關擊柝固より辭する所に非ず等外出仕にても謹て拜命仕度候間幾重にも御周旋奉願候也

この二十七段の手紙は事柄も馬鹿らしく文言も馬鹿らしく文字も亦馬鹿に、むつかしき、ものを拾ひ集め、皇の字などな、むやみに用ひて、ありもせぬ熟字を作り實に取り違へるもなき難文なれば決して手本と爲す可きものに非ざれどもこれを一段と爲して卷末に記したる趣意は世間に折々この種の難文ありて讀む人を苦しめ或は少年の輩これを見て文言の悪きを知らず徒に其真似をせんさて時を費す者も多きゆへ、わざと心得のため一例を示したるなり都て文章は、むつかしくして學者の作に似たるも事柄は至極馬鹿らしくして笑ふ可きものあり元來文章と事柄とは全く別ものにて、つまらぬ事も、むつ

かゝる可い大切なる事易く書く可い難き字を用ゐる人は文章の上手なるに非ず内實は下手なるゆへ、こゝさらに難き字を用ひ人の目をくらまして其下手を飾らんとする歟又は文章を飾るのみならず事柄の馬鹿らしくして見苦しき様を飾らんとする者なり譬へば本文の未段を易く書けば左の如くなる可し

右之次第にて徒に三四年をすこし唯今となりて獨身之世渡りにも困り春以來友達の家に居候いたし候處家内にあひそをつがされ私も心の内には立腹いたし候得共今更何處へと申し依りするべき先きもなく途方に暮れ候次第何卒憐れき被思召よき役人之口へ御取持被下度實は給金之多き方を望み候得共差向之處金之多少を可申場合に無之門番にても小使にても不苦候幾重にも御世話奉願候

斯く易く書けば誰にもよく分り随分讀みやすき文章なれども丸出しにしては見苦しきゆゑ無益にむづかしい字を用ひて其見苦しき様を飾る趣向なり今の世の中に流行する學者先生の文章云ふものも其樂屋に遣入て見れば大抵この位の趣向なるゆへ少年の豎必ず其難文に欺かれざるや用心す可し其文を恐るゝ勿れ其人を恐るゝ勿れ氣力を儘にして易き文章を學ぶ可きなり

是實に獨り難字難文を用ゆる漢學者流の愚を晒ふのみならず、亦當時官途の希望の卑屈士族を嘲笑し、一讀爽然として大悟徹底せしむる者あり。吾人之を聞く、歐洲中古封建政治の衰ゆるに際して、ドンキホテ一なる一書出で、封建武士の陋癖を躍然紙上に摸出し、讀者をして一讀一笑せしめ、遂に之を以て封建政治の惑溺を笑倒したりと、君が如きも亦此類のみ。

嘲○笑○的○の○特○色○と○相○伴○ふ○て○離○れ○る○も○の○は○、○懷○疑○的○の○香○味○是○な○り○、○君○の○文○章○に○於○て○懷○疑○的○の○香○味○あ○る○は○。○猶○ほ○朝○鮮○の○料○理○に○於○て○胡○椒○を○見○る○が○如○し○、○如○何○な○る○文○中○に○も○是○れ○な○き○は○な○し○、○前○に○掲○げ○た○る○惡○文○の○一○例○の○如○き○亦○然○り○と○す○。○思○ふ○に○心○理○的○の○發○動○よ○り○考○ふ○れ○は○、○嘲○笑○的○と○懷○疑○的○と○は○、○勢○ひ○離○る○可○か○ら○す○し○て○、○聯○結○の○働○き○を○爲○す○者○な○る○べし○。○試○み○に○想○へ○、○君○の○文○章○の○重○な○る○部○分○は○、○多○く○は○可○定○し○た○る○に○非○ず○し○て○、○否○定

したるなり、可しと云ふ意味に非ずして、可からずと云ふ意味なり。

例せば第二冊第六教に、左の如き言あり、

娘云く余よく書物を讀む○大云く余よく猫を捕る○鳥云く余よく空を飛ぶ○或人云く余よく天に登る○この言は信す可らず○子供云く余よく馬に乗て水を遊ぶ○この言は信す可し○人足云く余よく書物を讀て明に物事の道理を知る○この言は疑ふ可し○鼠云く余よく猫に勝つ○この言は大言なり○書生云く余よく天下を支配してこれを治む○この言は大言なり

試に思へ「信す可らず」と云ひ、「疑ふ可し」と云ひ、「大言なり……故に信す可らず」此の一句は記者の挿入に係る」と云ふ、是皆な端なく懷疑的思想の發作したるものにあらずして何そや。只た此の香味あり、此に於て嘲笑諷刺的天才をして、踴躍生動せしむ。君は既に此の二個の特性色を存す、恰も猿公の手裡双劍を舞はすか如し、其の明治新文學の運を啓き、一代に虎視鷹揚する所以のもの豈に奇とするに足ら

んや。世には笑ふ人あり、泣く人あり、怒る人あり、君の文章に就て之を察すれば、泣く分子は絶て無し、怒る分子は僅に有り、笑ふ分子に於ては滿幅皆是なり。其笑ふや必ずしも自ら抱腹絶倒せざるなり、自ら手を戯にし、眼を瞋らし、怒罵嬉笑せざるなり。其笑ふや、必ずしも嬉々喞々、自ら抑へんと欲して抑ゆる能はざるか如く爲ざるなり。抑又た其笑ふや、殊更に鹿爪らしき顔を爲して澄し込まざるなり、他人をして殆ど噴飯せしめ其眉を軒げしめ、其齒を見はさしめ、其聲を揚げしむるに拘はらず、躬ら儼然として、朝衣朝冠を着け陸階の上に坐するが如き形容を爲ざるなり。左ればとて小兒の母の顔を見て笑ふが如きにも非ず、黃鳥が梅花の蔭にありて囀づるが如きにも非ず、春水が石に逢ふて渦紋を作るが如きにも非ず、大人君子が快然たる時に

於て、其顔面に笑容を流露するが如きにも非ず。其笑ふや、實に一種獨得の笑容あり、必ずしも俗士の笑の如く熱躁なるに非ず、高僧の笑ふが如く冷かにして淋しきに非ず、福澤流一種獨得の笑を具へたる者なり。若し強て之を云はば、辛味六分にして甘味四分の嘲笑のみ。若し強て之を區別せば、熱笑に非ずして冷笑なり、併し其冷は、必ずしも箱館氷の如き冷かなるに非ずして、先づ多摩川上水位の冷味を帶るものと知るべし。只この冷味の混々としてポンプより出るが如き時に至りては、殆ど炎天の火事も忽ち消止めんとするの勢ありと知るべし。思ふに君が今日の文章、幾分が強弩の末魯編を穿たざるの歎なきに非ずと雖、猶是等の特色存す。而して是等の特色の存するは、殊に此の片々なる小冊子にして、世人の已に忘れ、書籍室に於ては塵埃と同居し、書肆に於てすら最早その名をすら記するものなき此小冊子に於て、

圓満に發揮したりとせば、吾人が之を珍重して吹聴の勞を取るも、亦故なしとせん哉、亦故なしとせん哉。今もし君が文章の缺點を擧れば、爛熟なるに在り。流滑なるに在り。淺薄なるに在り。卑俗なるに在り。野鄙なるに在り。輕佻なるに在り。憤焉として自放なるに在り。粗頭亂服なるに在り。其廣長舌に在り。其重厚の氣味なきに在り。其神韵に乏しきに在り。其道德上の熱火炎々たるに在り。是等皆君が長所の其度を過たるより生じたるものなりと雖、重見層出聊か厭ふ可きの觀なき能はず。然れども説て、夫婦、父子等の事に到れば、人をして恰も家庭融々の眞樂を目に觀、耳に聞くが如く、讀み來りて肅然襟を正して危坐せしむるもの有り。又人生處世の要に到れば、恰も仰で天に恥ず、俯して地に忤ちざる、一個の光明磊落なる人物を觀るの感を與へ、恰も別製に出るが如きも

君の眞學問は蓋し人間を離れざる也

君の文章は是れ獨歩する所

の有り。此一事は「文字之效」中に於て之を知るに充分ならざれども、吾人は曾て君が文を読み、聊か知る所あるを以て茲に附記す。

エメルソンいへる言あり、人は只、人を描き、人を作り、人を思ふと。斯言もし真なりとせば、君に於て最も真なりとせざる可からず。吾人は果して君の幾何の學力を有するや知らず、然れども君の眞學問は、蓋し人間を離れざるなり。百般の人事は渾て君が學問の材料たりしなり。故に君の文章は、極めて人情に近し。人々の心に思ふて口に語らざる所のもの、日常之を爲して而して自ら其何の故たるを覺らざる所のもの、渾て君に依りて之を説明せらる。君は普通人民の代言人なり、辨護人なり、傳教師なり、案内者なり。而して君が言ふ所、最も人に切實なる所以のものは、毎に其人情の極所を刺せばなり。人の容易に面に表はさずして、亦常に片時も遺れざる所の極所を刺せばなり。君

君の事業は以て獨歩する所

が文章の天下に獨歩する所以茲に在らん。而して君が事業の天下に獨歩する所以も、亦恐らくは茲に在らん。



山縣伯に與ふるの書

謹て書を山縣伯の閣下に呈す。匹夫にして大臣大將と爲る、閣下の如き者、我邦に於ては今古其比を見ず、閣下亦た榮なりと云ふべし。閣下が菽に於て、竹刀を舞はし木槍を揮ふたる時に於て。松下村塾に參して松陰先生踴厲風發の議論を聳聽し、慨然天下の憂に先たんと逸りたる時に於て。その奇兵隊長となり、俗論黨の首を馘り、馬關に於て英、米、佛、蘭の軍艦と應戦したるの時に於て。高杉晋作、山縣狂介の名は、山陽鎮西の間に轟きたるの時に於て。その征討參謀となり、春雪の融くるに乗し北越の野に長驅して、賊巢を衝きたるの時に於て。その西郷從道君と相携へ、歐米諸國を漫遊しナポレオン三世全盛の時に於て、佛都の壯麗に驚きし時に於て。その歸りて兵部省に入り、前

時に於

原兵部大輔の後を襲ぎ、初て日本陸軍の基礎を定めたる時に於て。その老西郷に向て膝詰めの談判を爲し、廢藩置縣の議を決し、老西郷をして万金よりも重き一諾を吐かしめたるの時に於て。その十年の亂、肥薩の山川を跋涉し、馬を立て、城山没落の硝煙を望みたる時に於て。その十四年大隈伯の騷動に際し、薩長聯合して天下に衝るの決心を極めたるの時に於て。その明治十九年陸軍省中改革の陰謀を看破し、將に破裂せんとする噴火山に手を蓋せ、電光一閃陛下に奏上して、忽ち之を鎮壓したるの時に於て。その明治二十年保安條例を天外より轉はし來り、天下の志士を皇城三里の外に放逐したるの時に於て。その二十一年の末、地方自由制度、及び要塞砲兵、砲臺等の事を取調べの爲、歐洲に發程したる時に於て。その塊土に於てスタイン學究の講義に感服したるの時に於て。その伯林に於て三十餘日、汲々屹々一介の老書生

となり、實地に自治制を研究したるの時に於て。而してその歸帆恙なく横濱に上陸するの時に於て、豈豫しめ今日あるを期せし者ならんや。顧みて三十餘年來の経歴を見れば、閣下眞に是れ邯鄲夢裡の人に外ならず、豈亦た榮なりと云はざる可けん哉。余は閣下を目して榮なりと云ふ。然れども多福の人と云ふ能はず。何となれば閣下は泰平の宰相に非ざればなり。今日の天氣、静謐は則ち静謐なり、然れども其静謐は、急雨颶風將に到らんとする寸刻間の静謐なり、唯だ覺ふ萬重の黒雲頭上を壓するを。之を譬れば眞綿の中に爆裂弾を包みたるか如し、唯だ覺ふ一道の火氣乍ち百雷を轟かし來るを。明治二十三年は如何なる歳ぞや、之を思へば余は、閣下の多福を羨まざして、その多難を悲む。之を聞く、閣下の歐洲より歸朝するや、滿朝の大臣皆を閣下を推すに總理大臣たる事を以てしたり、然れども

閣下は之れを辭せり、彼等固く之を閣下に薦めたり、而して閣下復た固く之れを辭せり。余は閣下の之れを辭したる、決して彼のシニヤルかアソドニ一の捧けたる王冠を斥たるが如く、王安石が屢々朝命を辭して拜せざりしが如く、偽善策略の底意に非ざるを知る。閣下事に當りて毎に幾多の思慮を費す、一の法を布き、一の令を發する、尙ほ千思萬考せり。思ふに閣下總理大臣と爲ると否とは、實に閣下の身に取らて一大事件と云はざるを得ず。之が爲めに幾何の懊惱を費せしか、余は之を推測する能はず。思ふに閣下の稀有なる顛骨と共に隆然堆起したる双頬の肉浸く落ち來りたるも、或は之が爲ならん。而して遂に受ざる可からざるに至りしは、四圍の事情已むを得ざるもの有りしと雖、閣下亦た衷に斷然決する所のもの有りしや知る可きのみ。閣下同郷の人士には、才英頗る寡からず、春畝氏の滑脱深智を以て其位を避

亦聊下なり
多し者
也

閣下も
亦一個
の政治
家也

け、世外氏の不羈巨腕を以て其責を逃る、而して閣下に與ゆるに此の
 貧乏籤を以てす、閣下豈この貧乏籤を知らざる者ならんや。而して遂
 に之を受たる所以のものは(已むを得ずしてとは云へ)豈に獨り功利の
 一念のみならんや、亦正に殘軀を苦海に投して、功臣政府掉尾の任に
 衝らんと欲したるや知る可し。余は閣下の爲に此の多難の局に當りた
 るを哀むと雖も、知りて之に當りたるを見て、亦聊か閣下を多しとす
 る者なり。閣下既に此難局に當る、苟も當る以上は、必ず此難局に處
 するの一大經綸あらん、余は敢て之を閣下に問はんと欲す。聞く閣下
 自ら言ふ、余は政治家に非ずと。閣下果して斯の如く思ふか、恐らく
 は謙辭ならん。余を以て之を見れば、閣下も亦一個の政治家たるに相
 違なし。閣下は圓滿に發育したる儀表的政治家に非ず。その創樹の材
 器を有する、大隈伯に若かず。その政治家風の常情コンセンサスを有する、伊藤

特性本
領

伯に若かず。その突兀驟忽大旋風に鞭て走る、井上伯に若かず。その
 自ら智にして馬鹿な振りをする、西郷伯に若かず。その西洋流の交際
 に慣れ、踏舞に熟し、饗宴の席に賓客と語る、大山伯に若かず。
 然れども閣下は亦、その特種の長所を有す。閣下は自ら物事を案じ出
 したると無し、然れども人の案じ出したる物事にて、自ら善しと之を
 信すれば、固く執りて動かさるなり、閣下容易に斷せず、人その斷少
 きを疑ふ、然れども一度之を斷すれば、鐵壁も亦透さんとするなり。
 殊に閣下專有の特色は、其の精苦にして倦ざるに在り。規則立ちて秩
 序齊然たるに在り。滿朝の政治家皆な胡蝶の如く、輕々として空を飛
 び行けり、閣下獨りその足を擧るや重く、その踵を着するや堅く、そ
 の趨るや歩武整々、恰かも大隊の運動する如し。此の觀察點よりし
 て閣下を評すれば、閣下は寧ろ立憲政治家の資格の幾分を具へたる者

と云ふ不可なきなり。余か閣下の自ら稱して政治家に非すと云ふを目して謙辭となすは、乃ち之れが爲のみ。閣下の眼は遠を見るの明あるや、余之を知らず。閣下の耳は幽微を聴くの聰あるや、余之を知らず。閣下の頭腦は千種萬異の物を聚めて、一の編物細工を拵へ得るの力あるや否や、余之を知らず。閣下の胸中には清濁併せ呑み汪々たる萬頃波瀾を湛ゆるか、余之れを知らず。然れども閣下の踐む所、頗る重く、閣下の握る所、頗る堅く、閣下の立つ所、殆ど之を右に推す可からず、之を左に揺かす可からず。

陸軍部内に於てはイザ知らず、之を全國よりすれば、閣下は國民より非常の愛着を受け居らぬ代りに、亦非常の不信用を受居らぬなり。閣下を好まざる者は衆し、然れども閣下を信せざる者は寡し。閣下に服せざる者は衆し、然れども閣下を侮る者は寡し。胸襟水の如く他をし

非長技

然れども國民の尊敬を信するは、余は敢て閣下が、國民の尊敬と信用とを一身に聚めたりと云はず、然れども他の諸氏に比して敢て劣ると無く、否寧ろ多きを有す。政治家としての欲く可からざる二三の特性を有す。又た此特性を實際の上に發揮するに足るべき國民の信用と、尊敬とを(幾分か)有す。而して躬自ら之を發揮すべき又せざる可らざる總理大臣の位置

て己を親ましむるは、閣下の長技に非ず。電眼雷辯の下、一句の中、容易に人を活殺するは、閣下の長技に非ず。温乎たる其の容、藹然たる其の言、人をして春風の裡に坐せしむる如く感せしむるは、閣下の長技に非ず。磊落雄豪人をして一見崇敬の念を發せしむるは、閣下の長技に非ず。然れども閣下は、人より積極的に信ぜられざるも、消極的に疑はれざるなり。積極的に尊敬せられざるも、消極的に輕んぜられざるなり。余は敢て閣下が、國民の尊敬と信用とを一身に聚めたりと云はず、然れども他の諸氏に比して敢て劣ると無く、否寧ろ多きを有す。政治家としての欲く可からざる二三の特性を有す。又た此特性を實際の上に發揮するに足るべき國民の信用と、尊敬とを(幾分か)有す。而して躬自ら之を發揮すべき又せざる可らざる總理大臣の位置

に立てり。而して時は恰も之を發揮せねばならぬ明治二十三年の大危機に瀕す。此位置を踐み、此資格を具へ、此時に臨む、閣下それ如何にせんと欲する乎。

眼を轉じて閣下の同僚を觀れば、閣下の内閣も亦人なしと云ふ可からず。人或は閣下が某々氏等を大臣に推薦したるを以て、閣下の内閣は二割の價値を減じたりと云ふ者あれども、要するに是れ金箔崇拜者の空想のみ。その實力實材を以て論ずれば、閣下の内閣は、明治政府ありてより由來、最善の内閣に非ざるも、亦最悪の内閣に非ず。松方伯の諄々然として行政官たるの資格ある、薩人中稀れに見る所なり。西郷伯に至りては、二十餘年來閣下と淺からぬ關係を有する者にして、その閣下の内閣に重きを有する、今更ら言ふ迄もなし。其他青木子の博學なる、之を以て大學博士と爲すも、敢て不適任なりと云ふ可から

ず。芳川氏の如きは、俗吏の風ありと擯斥する人あれども、忠臣藏の芝居には、由良之助、判官のみにて満足すべきに非ず、時には鷲坂番内を加へざる可からざるを知らば、閣下の内閣に斯人あるも、亦必ずや憾むべきに非ず。若夫れ正宗の短刀の如く、當るを幸ひ切り撤くり、人を斬り、馬を斬り、柱を斫り、紙を截り、一絲の毛髮にても切れぬと云ふと無き切物を以て人物と云はば、閣下が内閣の新農商務大臣の如きは實に非常の人物と云ふべし。若し豹變反覆、言、物なく行、恒なきを以て英雄の本色と云はば、閣下が内閣の遞信大臣の如きは、實に大英雄と云はざるを得ず。閣下の内閣は金箔燦爛たる裝飾少し、然れども其の實能、實材、實力に於ては、決して油斷のならぬ内閣なり。而して閣下は實に、此内閣を統督すべき總理大臣なり。且つ閣下の幕僚亦多少の才を網羅す。井上毅氏の如き、閣下若し之を

馴致し、其の長所を利用するを得ば、是れ法律世界に於ては、實に一の飛將軍を獲たる者なり。而して末松、清浦、大森諸氏の如き、人或は一概に之を目して、變則法律家と云ふ者あれども、その閣下の爲に用を辨じ事を遂るは正則法律家の却て及はざる所ならん。その閣下同郷の後進にして、桂太郎氏の陸軍に於ける、白根專一氏の内務に於る、亦是れ閣下の腹心股肱とするに足る者なり。而して殊に閣下の爲に賀すべきは、警視總監に其人を獲たる是なり。閣下若し之を選抜したりと云はば、閣下も亦人を識るの明ありと云ふべし。少々の苦情は有れども概して云へば田中光顯子の如きは、實に立憲政治下の警視總監たるに恥ざるなり。警視廳の受附が、人民に向て愛相よき、巡查か路傍の行人に對して叮嚀なる、別段大政の機に關せざるが如し、然れども民心は、其の小なる所に向て合し、其の小なる所に向て離るゝを知ら

ば、之が爲に閣下の内閣に幾何の強味を増したるや、想ふに測り知る可からざるもの有らん。余は實に閣下の爲に其人を獲たるを祝す。則ち閣下は斯の如き幕僚股肱を有す、其他多少の才あらん、余未だ之を知らず。

閣下自ら顧みて如何。閣下既に己を知れり、閣下それ敵を知る乎。閣下恐らくは之を知らざるべし、余も亦之を知る能はず。何となれた今日に於ては、未だ敵陣の動くを見ざればなり、約して言へば、敵を見ざればなり。然れども閣下か内閣の情勢は恰も駿々乎として隧道の裡に入るが如し、後を願れば微明なり、前を望めば暗黒なり、而して今や閣下の内閣は、此暗黒の裡を通過せざる可からざるの勢ひに迫れり。ヂスレリーが所謂、暗中の跳飛をせざる可からざる時に迫れり、閣下果して其の跳飛を試みるの勇膽あるや、余は之れ有るを信ず。何とな

費下若
に當る
能は余
んば兵
を率て
之を實
施せん

れば閣下が假し餘義なきにせよ、此危機の時に際して、總理大臣を引
受けられたればなり。人或は閣下が今日に於て、首相の位置を譲るの意あ
りと云ふ、然れども余は之を信する能はず。受ざれば宜し、既に受た
る以上は、兎にも角にも其始末を着けざる可からず。聞く保安條例の
實施に際して、三島警視總監頗る遲疑す、閣下之を叱して曰く、軍を
出して敵と戦はざる前に退く者あるか、貴下若し其任に當る能はずん
ば、余鎮臺兵を率ゐて之を實施せんのみと。余は其言の眞偽を知らず、
然れども亦以て閣下が平生を卜するに足れり。况や此二十三年の今日
に於て、帝國議會の撰擧既に終結せんとするの今日に於て、自ら難き
を知りて難きを他に譲るが如き。春畝氏の如きは則ち可なり、閣下に
至りては其本領茲に在り。之を失ふ時に於ては、閣下の閣下たる所以
を失ふなり。閣下の思慮周匝なる豈に之を知らざらんや。是れ余か信

閣下兵
を知る
を以て
請ふ兵
を以て
譬へん

する能はずとする所以なり。
既に此難局に當るの決心あれば、其方略も亦講せざる可からず、閣下
それ籠城策を取る乎。抑も開放策を取る乎。此事たるや、吾人已に之
を論ぜり、今復た之を再言するは、存亡治亂の機一に茲に在るを以て
なり。閣下兵を知る、請ふ兵を以て譬へん。谷將軍の熊本城を嬰守す
るや、薩軍は國を空ふして出で來れり、曠日彌久其兵を頓する亦知る
べし、而して官軍は全國の兵を擧げて來援せんとす、一方には城を圍
むの敵兵疲れ、他方には城を救ふの援軍到らんとす、是時に於て孤城
を嬰守する、亦是れ策の獲たる者なり。閣下今日の境遇は、即ち大に
之と異なれり、試に政府を以て孤城に譬へ、閣下を以て主將とせん、
閣下之に籠城するとせよ、敵兵は何れの時に疲る乎、援軍は何處よ
り來る乎、久しきに瀰れば瀰る程、反對黨の勢は増加するなり、而

して政府黨の援兵は更に無し、是時に於て孤城を嬰守するは、策の獲たる者か、城を枕にして討殺するより他に妙案もなかる可し。閣下の兵機に明なる、豈に斯の如き下策を取らんや。今日に於ては籠城下策なり。城門を開て戦ふ、中策なり。立派なる手續を爲し城を放け渡す、上策なり。余が見る所斯の如し、閣下果して其孰れを取らんとする乎。閣下の爲に計るに、上策を用ゆるは最も妙なり。彼れ在野黨の諸氏、頻りに集會、新聞條例を改正し、保安條例の廢止を説く。今日に於て之を決行する、閣下の政府に於て何ぞ一毛を抜くの損あらんや。全躰の政畧孰れにしても議員多數の意見を容るゝと云ふ事に覺悟を極むれば、議員多數は、所謂暖簾に腕推しなるものにして、トテモ澤山の面倒は言ひ得ぬなり。閣下自ら國務大臣の責任なる者は、議院に對する責任なる事を明言せば足れり、千百の詭辯を假るを要せざるなり。是

則ち閣下の一言にして、憲法上の大議論を決するなり。既定歳出云々の如きは、固より齒牙に掛るに足らず、その範圍を廣くするも、狭くするも、別に政治上の大機には何の關係も無し。唯宜しく民間人士の言ふ所を審かにして、之に應ずるに在るのみ。若夫れ地租輕減、税法改正、政費節減等の如きは、豫しめ大藏大臣をして、其方案を提出せしめよ。政府に於て行はれざる事は、民間に於ても行はれざる事なり。民間黨の言ふ事にして行はるゝ事あらば、政府に於ても行はるゝ事なり。政府は只民間輿論の在る所を審かにし、之に應ずるの順序を爲せば可なり。若し民間黨の望む所無理の注文あらば、民間黨をして之れを調査せしめよ、彼れ再び手を熾くが如き拙策を爲ざるべし。議院に出て審かに其實際を調査する曉に於て、豈必ずしも無理の注文を爲さんや。無理の注文を爲す事あらば、是れ知らざるの罪なり。否寧ろ知

らしめざるの罪なり。衆議院に出で来る者とても、必ずしも大江山より出で来る鬼の類に非ず、彼等は皆人間なり、別に大なる心配を爲すに及ばず。

余が閣下に望む所のものは、常に閣下の仕打の民間黨よりも一歩づゝ先に出んと是なり。先んずれば人を制すとは、實に今日此節に於て、最も適切なる警語なり。閣下若し其心あらば、之を知るの道甚多し。現に閣下の同僚中にも、隠然たる大同團結派の首領あり、此人より聞くも一通りの事は分るべし、事は近に在り焉ぞ之を遠に求めんや。警保局の報告書の如き者は、その出たる所よりその達する所迄は、種々の手数を經來る者なり、或はその真相を失ふと無しとせず、盡る民間の新しき話は之れを閣下の同僚後藤伯に聽くこそ宜けれ。然れども若し此策を用ゆる能はずとせば、宜しく自ら議院に斫て出で、

又た政府も政黨に據りて立つの覺悟を爲し、此に政府黨なる者を募り、飽迄多數の賛成者を國會に出すの覺悟を爲し、之を内にしては内閣の意を一にし、之を下にしては政府の志を堅ふし、之を外にしては民間に於ける政府の味方を募り、彼れ新聞を須ゆれば、我も亦之に須め、彼れ演説を假れば、我も亦之を假り、彼れ議員の頭數にて戦へば、我も亦之を以て戦ひ、斯の如くにして勝つ、可なり、負るも亦不可なきなり、是亦た大丈夫の面目と云ふべし。然し斯の如き時には裏切り者の出ぬ様、最も閣下の用心を要す。若夫れ籠城策の如きは、下策と云はんよりも、無策の極と云ふの適當なるに若かず。然れども閣下若し城を枕にして討殺する覺悟なりと云はし、余復た何か言はん。



徳川武士の典型

沼間守一君

人群雜鬧、車馬喧騰せる上野博覽會場を左折して、行く數町。一塔高く夕陽の外に聳へ、森鬱たる老杉畫なほ暗く、満目の墓石沈々として聲なし。閑歩低徊端なく新墳の眼を射るものあり。搔き起したる土には草未だ生せざるなり、手向けたる花束は淺く朽去らんとせり。近づいて其卒都婆に書したる文句を讀めば、「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂、英光院正六位操守一實大居士」と。嗚呼是れ沼間守一君の墓耶。アントニー嘗てシザールの屍を抱き颯言して曰く、人の爲せる惡業は死後に傳はり、その善行は骨と共に朽ちぬと。吾人は沼間君に於て、一日の交遊あるにあらず、然とも無言の卒都婆は、吾人を驅

英光院
正六位
操守一
實大居士

沼間君
を没す
る所
を以て

りて、一片の文字を手向けしむるの止む可らざるを感せしめたり。昔は秀吉嘆じて曰く、家康佳士多し羨む可きなりと。徳川氏勃興の史を案するものは、此言の溢辭にあらざるを知らん。而して其子孫は如何に成りしか、戊辰革命の時に於て、麾下八萬騎は如何なる事を爲したるか、又た今日に於ては彼等は何事を爲しつゝ在るか。八萬騎の中には、今日と雖必しも多少の人物なきに非ず、然れども其多數は諸官省の小使と爲り居る者あり、給仕と爲り居る者あり、門番となり居る者あり、甚しきは路頭に客を呼ぶの車夫と爲り居る者すらあり。而して此中に於て、沼間守一君の如きは身亡朝の遺臣たるに拘はらず、肯て頭を叩て人に媚ず、肯て膝を屈して人に諛はず、肯て浮利を求めず、肯て僥倖に走らず、一己の手腕を揮つて逆運の重圍を縦横し、明治の社會に一頭地を出したるは、亦た没するに忍ひざる者あり。

君の経歴は之を三期に分つべし。第一武人としての——第二官吏としての——第三民間に立つ公人としての——是なり。君の傳を案ずるに、其家は幕府の下士なり、初め海軍を學び、後ち佛國の士官に就て、佛國兵式の傳習を受たり。蓋し日本兵制の改革に際しては、君の如きは最先きに其改革の洗禮を受たる者なり。

伏見の敗報江戸に達するや、和戰の議紛然たり。君獨り高言して曰く、余をして佛式傳習兵千五百を提げ、大阪城を衛り、東下の官軍を扼せしめば、以て三四ヶ月を支ふべし、此時に於て諸道佐幕の兵起らば、天下の事知るべしと。其議斥けらる。官軍東海道を下るの報あるや、君は大垣に於て、駿河に於て、函嶺に於て、三たび之を途に扼せんとするの策を建て、三たび斥けられたり。而してその結果は君をして當時講和説の頭領たる勝海舟氏を刺んと欲せしめたり。成らず。翻て其

親信する士官二十餘人を隨へ、會津に走り、野州に赴き、而して庄内に入り、遂に官軍の爲に押送せられて東京に抵り、偶々板垣退助君の爲に土佐に聘せられ、其兵制を改革し、事に訓練に従へり。君が軍事に於る経歴は、概して斯の如し。

記者嘗て之を板垣退助君に聞く。君の官兵を指揮して野州今市に戦ふや、偶々賊軍の喇叭卒を擒にする者あり、君就て之に問ふて曰く、汝何の頼む所ありて官軍に抗せんとするか、彼答て曰く、余は何も知らず、唯沼間先生の爲に戦ふのみと、君是に於てか初めて、沼間氏の尋常人にあらざるを知れりと。且その鋒を交るや、沼間氏か用兵の機敏迅速にして、部伍節制、一々法則あるを視、深く用ゆ可しとなし、維新亂平ぐに際して、遂に之を土佐に聘したるなりと。

明治五年、君當時の大藏大輔井上馨氏の爲に議拔せられ、大藏省の官

吏と爲り、幾もなく司法省に轉じ、遂に河野敏鎌氏等と相伴ふて歐米諸國を遊歴したり、君が河野敏鎌氏との交際は、實に是に始まる。而して其法律學を修めたる——否寧ろ法理的の修練を受たるは、實に是より始まると云ふべし。而て其歸朝するや、尾猿澤銅山の事あり、政府の處置に不満を抱て官を辭し、間もなく河野氏の爲に推薦せられて、元老院書記官と爲り、更に擢んでられて、鶴岡縣民疾苦の實況を調査するの大命を受け、明斷威信、縣官の稗政を爬羅剔抉し、之が爲に殆ど廟議を動かし、却て當路者の忌む所となれり。

君は政府に於て知己少く、加ふるに強項偃蹇爲めに驥足を伸ぶる能はずして罷めり。而して君が十二分の伎倆を揮ふたるは、實に民間に在りとす。君が生涯の中に於て最も華やかなる歴史は、實に民間の公人とて立ちたる時代に在り。

君が鶴岡縣の獄を斷ずるや、其名殆ど天下に轟けり、此よりして君は天下の士となれり。而して其一躍して當時東京の文壇、政壇の上に龍蟠虎踞し、瑰麗なる文字と、明敏なる議論とを以て、一世を風靡したる福地氏を擠し、取りて之に代りたるは實に明治十二年、東京府會議員、同區會議員、同商法會議所議員等が聯合して、東京府民の總代と稱し、天皇陛下の臨駕を上野公園に請ふたるの時に際し、君が「東京府民の名稱を濫用するの恐れ」と云ふの公開演説に在りとす。其の事柄の如きは、天下の大事に差響く程の事にもあらず、然れども君が硬辯勁舌、鐵を切り石を斷つ論を吐き、一世を驚倒せしめたるは、實に君が得意的生涯の絶頂と云はざるを得ず、その彼等は府縣會規則を無視せんと欲する乎と辯詰し、「若し此貴重なる法律をして口あらしめは脆然其冤を訴ふるならん若し此法律をして眼あらしめは潜然涙を

流し其誣罔を哀むならん」と謂ふに到りては、恰も北風の野火を吹ひて飛ぶか如く、怒潮の岸を嘯んで咽ぶが如く、今日に於て尙ほその生氣凜々紙上に響あるを覺ふ。

此の時に於て民間の望一に君に鍾る。天下の秀才皆な君が一顧盼を得るを以て登龍門の想をなせり。而して君亦た磊落眞率好んで交りて天下有爲の壯年に納れ、之を提醒推挽するを倦まず。此に於てか嚶鳴社の覇權一に君に歸せり。

嚶鳴社は實に東京に於ける、立憲的運動政社の嚆矢なり。初め君の歐洲より歸るや、その烟眼は既に演説討論の急務たるを看破せり。歸來法律講習會を設け、その十二年二月君か元老院を辭せる頃には、既に一轉して政談社となり、恰も君か爲めに豫しめ設けたる講壇の如く、社員皆な席を空ふして君を迎へたり。此に於て君此の講壇よりして、

天下に號令し、各地に二十三嚶鳴社を設立し、その威風延ひて東北及び東海道を震動せり。

君が毎日社の社長と爲り、一種法律的、解剖的、方式的、批評的の政論を發揮し。乾燥、硬酷、精細なる毎日社論調の法門を發きたるか如き。又初めて板垣君を助けて自由黨を組織せんとし、中むろ河野氏等と嚶鳴社の一隊を率ひて大隈伯の麾下に趣き、改進黨を組織したるが如き、今嗚々を費さず。君が改進黨員として盡したる事業は、その十五、十六、十七年に在り。然れども此事たるや、敢て君に於て、最も超絶したる事業と云ふ能はざるが如し。

然りと雖も君が最も民間の公人として力を用ひたるは實に東京府會に在りとす。君が府會に推選せられたるは、十二年十月なり、而して其職を奉ずる延て本年(二十三年)二月に至れり、其間の功績勝げて云ふ

君が公
人さし
て力を
用おた
るは賢
に東京
府會に
在りこ
す

可からず。君が職を去るに際して東京府會は、滿場の同意を以て君が
功勞を、其記録に特筆大書するを議決したるが如きは、決して過分と
云ふ可らず。君が東京府會に出る、周亞夫か柳營を督したるか如く、
順にその旗幟をして精明ならしめ、人をして瀟上の軍眞に見識に過ぎ
さるの嘆あらしめたりき。君は實に府縣會の議權を擁護せり。君府會
に入りてより府會をして硬府會たらしめたり。その議權を滿張せしめ
一絲だも緩ましめさりしなり。その權内に於ては一歩たりとも他の闖
入を容さしりしなり。その議權に於ける恰も自家の情婦に於けるか如
し、恒に猜疑の眼を撥て他の之に觸着せんことを監視せり。その故松田
東京府知事と防火線の論を交へ、越奇峽正龍虎相ひ闘ふたるの偉觀、
亦た此中の一消息に過ぎず。而して其府政を監督して、恒に當局者の
隱然一敵國となり、恒に銳意して府政の改良を促したるか如きは言ふ

地方議
權の確
立の好
念の紀
也

迄もなし。若し他日に於て地方議政權の確立するとあらば、是實に君
が好個の紀念碑と云ふ可きのみ、豈唯君に負ふ所のもの東京府會のみ
ならん哉。
君が一生の行路は、斯の如く變化ありしと雖、その特質は、一貫して
頭より尾に至るを見る。君自信の念最も篤く、恒に一個の成見を取り
て、何れの時にも必ず貫徹せんと欲したる者の如し。而して其の貫徹
を欲するの餘、直情徑行、敢て他の境遇情勢に頓着せざりし者の如し。
故に君は如何なる時に於ても、其味方を獲ると同時に、毎に敵を獲た
り。その逃れて會津に赴き、士官を教育するや、士官その苛酷に堪ず
して君を殺さんと試みたり。その政府に在るや、君が知己は、深く君
を愛重したりと雖、君が敵は深く君を畏惡せり。その東京府會に於る
や、君が位置は宛も雄雞の雌群に在りしか如きに拘はらず、遂に一の

君は全
数の人
に非ず
半數也

法律家
の眼を
以て軍
人的の
手を揮

木曜黨なる者出で來り、君等と抵抗せり。その改進黨に於るや君の力の及ぶ所、只嚶鳴社の一羽翼に止まり、敢て他に及ばざりしなり。是に由りて觀れば、君は到底半數の人にして全數の人に非ず、君が才力は鋭し、尖れり、敏なり、硬し、然れども其器は極めて小なる者と云はざる可からず。

若し仔細に君か頭腦を、解剖し來らば、吾人は只一の法理的頭腦なりと斷言するを猶豫せざる可し。而して之れを行ふに軍人的氣象を以てす、所謂君は法律家の眼を以て軍人の手を揮ふたるものなり。君は天然の討論家なり。その議論徑直、精酷、而して舌頭錐の如く、物として透らざるは無く、齒端鋸の如く、物として截れざるは無く、口角鱗の如く、物として磨せざるは無く。之を以てその大名を博し、之を以てその位置を造り、之を以てその怨を買ひ、而して君に於て最も多し

君に多
しは顯
るは正
業的事
非破す
て破邪
的在業
に在り

野性的
人物

○とするは顯正的事業に非ずして、破邪的事業に在り。君の事物に接するや、敵を設けざれば其全幅の伎倆を發する能はざるなり。而して一たび敵を見るや、之を塵にせずんば休せざるなり。甚しきは好んで敵を設け、而して之を奔竄せしむるを以て、自ら快なりとする者の如し。

君は實に窮寇を追ふの人なり。窮寇を追はずして息む能はざるの人なり。君か自然の本インスチンクト能此の如きのみ。是れ君が世間多少の敵を求めたる所以なり、而して其の敵を求めたるは、亦た君が野性の人物たるに由る。

君は風流閑雅なる都人士に非ず、君は安行莊容の紳士に非ず。君は實に野性の人物なり。その江戸に成長せしに拘はらず、野性最も馴致し難きは、殆ど木曾の山中に成長したる旭將軍に似たる者あり。而して只斯の如く其禮法を擺脫し、放縱自から豪なりとし、倨傲自から快な

りとし、而して少しく意に適せざる者は、忽ち嚴責痛譴人をして眼低り舌結ばしむるに至る。是を以て君を知らざる者は、只君が外貌を見て已に不快の感を抱かしむるに至る。要するに君が自信の念篤く、自家の價値を自覺するの極、覺へず此に到りたりと雖、その品性の修練を欠き、君をして野性の人物たるに止らしめたるは、實に君に於て深く惜む可しとなすなり。

然れども此缺點あると共に、他方に於ては實に君が特有の美質を有す。君は實に千百の過失あるべし、君は過失あるの人なり、而して過失ある事を毫も矯飾せざるの人なり。或は君を鄙吝と云ひ、或は君を剛愎と云ひ、或は君を倨傲と云ひ、或は君を放縱と云ひ、或は君を健訟の風ありと云ふ。然れども君を偽君子と云ふ者は、天下恐らくは有らざる可し。君は實に偽君子たる能はざるの人なり。世の狡猾者は、却て

品性の修練なし
し難し
亦決し
て偽君子
に非ず

法律的精神
の軍人
的の偏
神の立
非もす
ず

其心中の機巧を藏するに質樸の外形を以てす。然れども君が眞率は自然の眞率にして、その開濶は、自然の開濶なり。君眞率を以て偽善を爲さず、況んや虚飾を以て偽善を爲すをや。若し眞率を以て英雄の本色なりと云はば、君は優に此本色を有する人なり。

人或は法律的精神と、軍人的の精神とを以て、兩立する能はざる者と思ふ者あらん、是實に皮相の見なり。彼の法家の如きは、其考案恒に法界以内にして、甚しきは法典以上に出さることあり、故にその繹ぬる所は、第二の眞理に止るなり。故に法家の問題動もすれば獨斷的に陥り易し。兵家の考案勝敗以外に出てす、而して事をなす、實に獨斷的のみ。故に其外形を異にするに拘はらず、兵家と法家は、最も其縁を近くする者なり。其外形に於ては法家は只法理を以て本とし、兵家は只勝敗を以て本とするの差あるのみ。一は法理の在る所之を窮め

ずんは息まず、一は勝利の在る所之を窮めずんば息まず。彼等は兩なから、人を以て人と做すに非ず、人を以て物と做すなり、則ち其人に接する、宛も自然力の物に及ぼすが如し。苟も高より顛ぶ、如何なる聖人顛ぶも、如何なる愚人顛ぶも、重力の法則にては、兩ながら容赦せざるなり。彼れ愚人なれどもその罰重きにあらず、彼れ聖人なれどもその罰輕きにあらず、法家の物を裁判する此の如く、兵家の兵を行るも亦斯の如し。然らば則ち沼間氏に於て、此二者の合體を見る、豈必ずしも奇とするに足らんや。

聞く君が河野氏に於る、その知己の感固より篤し、君若し己を知る者の爲に死すると云はし、君は實に河野氏の爲に死せざる可からざるの間柄なり。而して明治十七年、河野氏の改進黨解黨を主張するや、之に向て先づ反對したるは君なり。是なほ黨派の大問題に關する事なれ

生命ある裁判
的器械あり
活る鋼鐵像

自ら信
長を以
て比ぶ

ば敢て異とするに足らず、河野氏が株式取引所の頭取と爲らんとするや、河野氏初より君が己に投票せんことを待居たり、而して其開票の際にして、君の投票は河野氏に非ずして、他人に在り、是に於て河野氏亦た憮然たりしと云ふ。君が自家の意思に於て決する所、千纏萬縛の情實を截斷して、一意之を敢行する、大概ぬ此の類なり。觀て茲に至れば、君は宛も生命ある裁判的器械と云ふも不可なからん。活力ある鋼鐵像と云ふも不可なからん。

聞く、君は屢々織田信長の人となりを稱したりと。思ふに私淑する所ありしならん。君は決して織田信長に比すべき人に非ず、信長ならんことを學んで未だ到らざる人なり。強ひて之を比せんとせば、百分一の信長と云ふも不可なきなり。若互に相類したる所を求めば、その事に於る疾風猛雨の如く、直截迅速なる相類せり。その忍刻相類せり。そ

軍人として
リニエール
ポルトの上
の政治家に
出でず
政治家を
政治として
はフヒ
リップ
フラン
シスの

の酷烈相類せり。その倨傲相類せり。然れども其胸に遠大の經綸を畫き、手に長條を握り、天下の英雄を驅使鞭撻して、以て大業を成すに至りては、君が七たひ更生するも敢て企て及ぶべき所にあらず。君が生活するの空間甚だ廣からず、君が呼吸するの時間甚だ長からず、君が眼孔は最近の物を射れり、君が手腕は最近の物を櫻めり、君が頭腦は最近の物を靈括せり。君は到底局部の人にして、大局の人にあらず、方面の任にして、總督の任にあらず、軍人としては、リニエールの上に出でず、政治家としては、フヒリップ、フランシスの列に在り。然れども如何なる境遇に立つも、一個の飛將軍たるの資格は失はざるなり。君をして元龜天正の時代にあらしめば、二十萬石内外の大名となりしならん。或は恐る君が自から恃むの念篤き、而して他人の羈厄に堪ず、動もすれば奔蹏猛嚙するの甚しき、或は塙團右衛門となり、

列に在

所謂硬
漢所
謂德
武士
典
型
の
川

後藤又兵衛となりて、大阪陣の隊將となりて已みたりし事なからんを。

然りと雖君は、板垣伯に識られて板垣伯の爲に致されず。井上伯に識られて井上伯の爲に致されず。大隈伯に識られて大隈伯の爲に致されず。河野氏に識られて一個の好兄弟と成り、對等の交際を爲し、遂に又た之が爲に致されず。獨立孤行、自家額上の熱汗を絞りて、途に當るの荆棘を剪伐し、終に嶄然たる頭地を明治社會の一角に露はし、壓制の敵となり非法の敵となり、自由の味方となり、正義の味方となり、その公共的生活に於ても、多くは正義に近き行爲を遂げ、豪然たる一個の硬漢を以て、一生を始終したるは、亦以て三百年前徳川武士の典型を存したるものと云はざる可らず。吾人は平生君を愛慕したる者に非ず、然れども之を想へば、君が寂寞たる新境に對して、一掬の

○哀○淚○を○灑○か○ざ○ら○ん○と○欲○し○て○、○自○か○ら○禁○す○る○能○は○さ○る○を○覺○ゆ○。



矢野文雄氏

明治二十三年帝國議會開設の初年に於て、改進黨の領袖矢野文雄氏政界を退隱す。世の之を議する者曰く、是れ幽幕中に秘謀を行はんが爲のみと。或は曰く、是れ難きを避んが爲なりと。或は曰く、是れ衆議院の面倒を遣れ、却て貴族院の閑地に優遊せんが爲なりと。その評判、政治社會に雜然たり、是れ果して矢野氏の爲めに吊す可き耶。抑も亦た祝す可き耶。

政治家の憂は、世人より忘却せらるゝより大なるは莫し。その絶叫する何れの處よりも反響來らざるなり、その慷慨する何人も切齒扼腕せざるなり、その歌ふ、何人も和せざるなり、その舞ふ、何人も調子を合せざるなり、その運動を爲す、何人も識らざる者の如し。政治家斯

麻の如き一動一静に束縛せらるる間こそ、政治世界の生活なれ。吾人は矢野氏が一舉一動の世人より注目せらるる斯の如きを見て、其一身の天下に繋ぐ所、亦た輕からざるを知る。毀譽の如何は吾人が關する所にあらず、唯一身を以て斯の如く毀譽の焦點たらしむる者は、亦以て前途の多望を徵するに足る者あり。然れども政治家は、一國の共有物なり、國人にして其共有物の真相を知らざる時に於ては、不幸之より大なるは莫し。矢野氏

の如きに至らば、其の政治的の生活は、最早墓中に埋葬したるものと諦めざる可からず。矢野氏の如きは然らず、その故郷に歸る、人陰謀あるを疑ふ、その京坂に滞留する、畫策あるを疑ふ、その報知新聞をして一種の營業新聞たらしむる、人以て深意の測る可からざるもの有るを疑ふ、その病を謝して世に出ざる、却て神龍淵に在るの見を爲す、紛々たる毀譽亂れて麻の如し。唯この麻の如き毀譽に一舉一動を束縛せらるる間こそ、政治世界の生活なれ。吾人は矢野氏が一舉一動の世人より注目せらるる斯の如きを見て、其一身の天下に繋ぐ所、亦た輕からざるを知る。毀譽の如何は吾人が關する所にあらず、唯一身を以て斯の如く毀譽の焦點たらしむる者は、亦以て前途の多望を徵するに足る者あり。然れども政治家は、一國の共有物なり、國人にして其共有物の真相を知らざる時に於ては、不幸之より大なるは莫し。矢野氏

黨派の内なる人、黨派の外なる人、黨派の外なる人、黨派の内なる人

若し政治家なりとせば、吾人は我國人の其真相を知得んとを望む。吾人敢て之を知得たりと云はず、唯聊か世上の見に異なるものあり。請ふ少しく之を開陳せん。

明治廿三年は、實に疑問の歳なりと云ふべし、而して矢野氏に取りても、亦實に疑問の歳と云はざる可からず。何ぞ疑問とは。曰く、黨派的の人として立つ乎、黨派外の人として立つ乎、別言を以て之をいへば、黨派の領袖と爲るべき乎、國民の領袖と爲るべき乎、事實に依りて之を云へば、別種の大隈伯たらん乎、別種の福澤諭吉氏たらん乎。憶ふに此疑問は、矢野氏の胸間に輾轉して、未だ全く其解釋を得ざるなるべし。想ふに今日は、否寧ろ本年は、黨人たる生活に一步を深入りするか、又た一步を轉して黨人外の生活に移るか、矢野文雄氏は、實にその十字街頭に立つ者と云ふべし。思慮縝密は矢野氏の本色なり。

前途の矢野氏は自ら知る能はず

事物を謹嚴鄭重にするは矢野氏の特性なり。之を思ひ、之を思ひ、復た之を思ふて、今日尙未だ全く決する所あらず、少焉く鎗を此十字街頭に立て、徐かに左右前後の形勢を願望しつゝ有るが如し。而してその何れの邊に向て歩を轉ずるかに至りては、矢野氏自ら知る能はず、曷ぞ矧んや吾人門外漢に於てをや。人間の生活は、内部の意思のみにて定まるものに非ず、又た外界の狀態に依りて大に變化を與ふる者なれば、假し矢野氏に於て右せんと欲するも、外界の狀態に於て左せよと云ふ時に於ては、必ずしも之と抵抗する能はざるべし。然れば其前途如何なる邊に向て歩を轉ずるかは、亦矢野氏の意志すらも、之を定むるに甚だ難しと云はざるを得ず。矢野氏既に斯の如き大問題を其腦裡に蓄へ居れり、今日に於て何の暇ありて、秘策隱謀を爲んや。吾人は矢野氏か胸中、常に多事なるを知ると同時に、亦極めて一身を愛惜す

⑨

彼は政治家として餘り哲學者は少く、哲學者として餘り政治家らしむと。吾人が矢野氏に於て見る所も亦斯の如きのみ。惟ふに是實に矢野氏が、他の紛々たる政談家、新聞記者、演説家、小策略家、事務家等に對して、一步を超越したる所以なるべしと雖、氏をして大に爲す所あらしめざる者は、不幸にも此二個の性格合躰したるが故のみ。之を譬ふれば、其一脚は堤上に立て蓮花を賞せんとし、其一脚は泥中に入りて蓮花を採らんとす。而して下半上、兩ながらその多望なる將來に於て、其欲する所を違ふせざるが如きの不幸あらしめば、其の原因は實に茲に存すと云ふも不可なからん。

動を爲んや。昔は人曾てポルクを評して曰く、彼は政治家としては餘り哲學者らしく、哲學者としては餘り政治家らしくと。吾人が矢野氏に於て見る所も亦斯の如きのみ。惟ふに是實に矢野氏が、他の紛々たる政談家、新聞記者、演説家、小策略家、事務家等に對して、一步を超越したる所以なるべしと雖、氏をして大に爲す所あらしめざる者は、不幸にも此二個の性格合躰したるが故のみ。之を譬ふれば、其一脚は堤上に立て蓮花を賞せんとし、其一脚は泥中に入りて蓮花を採らんとす。而して下半上、兩ながらその多望なる將來に於て、其欲する所を違ふせざるが如きの不幸あらしめば、其の原因は實に茲に存すと云ふも不可なからん。

若それ頭腦八面玲瓏にして、彼を知り、己を知り、長短を比較する時
 に於ては、到底黨派的の生活を爲すに於て、甚た困難なるべし。何と
 なれば黨派の戦畧は、則ち軍人の戦略にして、其運動は往々只勝つに
 在り。それ只勝つに在り、故に自己の短所も自ら之れを蔽はざるを得
 ず、敵黨の長所も自ら之を傷けざるを得ず。短所と知りて短所を蔽ふ
 は、既に五分の弱味を有す、長所と知りて長所を攻撃するは、既に五
 分の弱味を有す。故に眞正の黨人たる者は、己に短なる所あれども、
 己自ら其短なる所を知らざるに在り、敵に長ずる所あるも、己自ら其
 長する所を知らざるに在り。眞正の黨人たる者は、己の黨の爲す事は、
 悉く天使の爲す所と思ひ、反對黨の爲す事は、悉く悪魔の爲す所と思
 ひ、己の爲す所は國家最大の利益と做し、反對黨の爲す所は國家最大
 の禍害と做す、一意専心、毫も此點に向て疑ふ所なきに在り。斯の如

くに於て始て、一生懸命の力を出し、以て反對黨と戦ひ、その勝を制
 するとを得べし。若それ公平なる頭腦を以て、二者の長短を比較し去
 る時に於ては、頭熱己に冷かに、機心亦た消し、遂に爲す所を遅くす
 る能はざるに至る。矢野氏の如き、若し黨人たる資格に適せずとせば、
 其の罪は識量の短なるに非ずして、眼孔靈敏なるに在るのみ。而して
 眼孔靈敏、止水物を照すが如き人と雖も、動物アニマル、スピリット的の活氣に富む人は、
 一時の發情力に依りて之を抹殺し去るを得べし。而して不幸にも、矢
 野氏には此動物的の活氣少なし、是實に黨人として最も憾むべしと爲
 すのみ。動物的の活氣とは何ぞや、事に當り、物に接して、猛然、奮然
 直前勇進する者是なり。是時に於ては箭、弦上に在り、放たざるを得
 ざるなり、丸、銃口に在り、發せざるを得ざるなり、馬蹄軽く颯る、
 奔らざるを得ざるなり。唯この動物的活氣あり、是を以て板垣伯の如

氏は實
腕の非
人に非
ず人の
眼の非
也

きは、百敗屈せざるなり。是を以て陸奥氏の如きは、明治政府の謀叛人よりして、明治政府の大臣と爲りしなり。是を以て林有造氏の如き、身世軼軻、尙ほ少年と伍して自ら奮ふなり。而して吾人は、動物の活氣の恰も中島信行氏に乏しきが如く、氏に於て乏しきを見る。若し氏をして功名を成さしむる者あらば、實にこの動物の活氣なきに因らざるばならず。然れども若し君をして、身世崎嶇に遠ざからしむるもの有らば、この動物の活氣なきに因らざるばならず。蓋し此の動物の活氣は、眼を撥らく所の人には不用にして、腕を揮ふ人の爲には入用なり。而して君は實に、腕の人に非ずして眼の人なり。能く見る者必ずしも能く行はず。君の如きは其手腕決して鈍なりと云ふ可からず、若し其手腕を以て戦ふも亦た尋常人の比に非ずと雖、君の長所は、此手腕を揮ふに非ずして、その周到なる、明敏なる、精緻

君は張
其は張
劉基本
多佐渡
守の系
統に屬
する者
也

なる沈重なる眼孔を以て、常に天下の大勢を揣摩するに在り。故に君をして黨人たらしめば、君をして此の天分の高處を利用せしめざる可からず。然るに君が改進黨に於るや、君をして蕭何の任に膺らしめ、韓信の任に膺らしめ、甚しきは樊噲、周勃と共に、攻城野戦の勞に服せしめんとす。君が之れを以て其煩に堪へずと爲すも、亦故なきに非ず。君の人物は、張子房、荀彧、劉基、本多佐渡守等の系統に屬する人物なり。然るに君に任ずるに樊噲、周勃を以てし、許褚、張遼を以てし、井伊、本多を以てす。是實に人物經濟の道に於て、甚た其運用を誤るものと云ふべし。然るに彼の改進黨か君をして其技倆を逞くせしむる能ざるは、漢高なきが故乎。曹孟德、明太祖、徳川家康なきが故乎。假し主將その人はあるも、其股肱の人多からざるが爲に、張良をして樊噲を兼ねしめ、本多佐渡守をして井伊直政、本多忠勝を兼ねし

君は冷眼者に非ず
然るに非ざる
履も憤せず

春畝伯
龍溪氏

むるに至りたる乎。孰れにしても残念と云ふべし。

然りと雖も君は冷眼者流に非ず。君の冷なるは。氷の冷かなるに非ずして、炭の冷かなるに在り。故に一たび中に動く所あれば、熱情沸々として興る。然れば君の文章は、その尋常の日に於ては、平々然として高低なき野蹊を踏むが如きの情あれども、一たび中に激する所あれば、莊重大、光燄鬱勃として來る。古人曰く怒りは則ち一種インスピレーションなりと、吾人が君の爲に惜む所は、たい屢々憤せざるに在り、激せざるに在り。

吾人は君が退隱の理由を知る能はず、然れども其の君が退隱を以て、春畝氏が退隱に比すれば、亦是れ一種の双對法アナロジを發見するを覺ふ。春畝氏の明治政府に於ける、龍溪氏の改進黨に於ける、其關係實に退くに退かれぬなり。而して二者與に、此二十三年に於て、超然長往、往

再斯可
矣

て返らざるものは何ぞや。吾人は只言ひ難しと答へんのみ。

吾人をして率直に評せしめば、應に左の如く云ふべし。矢野氏にして若し黨人として世に立んと欲せば、多少今日の性質徑行を枉げざる可からざる者あり。然れども斯の如き時に於ては、政治上の功名手に唾して取るべし。若し黨人外の生活に安んぜば、今日の徑行の儘にして可なり。延ひて之を長ずる時には、亦是れ我邦に於ける第二の福澤諭吉氏たる未だ期す可からざるの事に非ず。抑も氏が望む所は孰れに在るか。天爵耶。人爵耶。政治上の功名耶。社會上の好位置耶。それ孰れを取らんと欲する耶。將それ兩ながら獲んと欲する耶。唯何れにしても吾人が君に向て最も敬服する所にして、且つ最も嘆惜するものあり。請一言せん、論語に曰く「季文子三思而後行、子聞之曰、再斯可矣」と。吾人も亦龍溪氏に於て爾か云ふ。

本論を公にしてより後、未だ幾何ならずして、矢野氏は、宮内省に入れり。然れども余は宮内省の氏が終焉の地にあらざるなからんとを望むや切なり。 著 者



元 田 東 野 翁

人生夢の如し。乍ちにして來り、乍ちにして去る。その來るや、悦ぶものあり、然れども世界は黙々たり。その去るや、哭するものあり、然れども世界は沈々たり。彼れ何ぞ冷淡なる、彼果して涙なき耶、情なき耶、血なき耶。彼れ大海の如し、細流之に注ひて、更に溢ること、を爲す、水蒸氣騰昇して、更に涸ること、を爲す、盈る無く、虚る無く、始無く、終無し。人の生死、猶其れ一滴水の去來のみ、彼豈に無情ならんや。彼れ餘り大にして、更に其の細胞の變遷に向て痛痒を感ずると能はざるが爲のみ。唯た此の痛痒を感ずる能はざる世界の大海に於て、猶ほ珊瑚島の星羅するが如く、其長歩の記憶に痕跡を留むる者あり、即ち基督の如き、釋迦の如き、孔子の如き、皆其一なり。

試に思へ、彼の孔子何事を成せし乎。彼は寂寞として世に出でたり、その出るや、天使來り謠ひ、明星來り飛はざりしなり。その死するや、寂寞として世を終はれり、之を哭したるは七十子の徒のみ。而して此寂寞たる一の紳士は、遂に三千年の今日迄も、世界の——少くとも半世界の師範として、其温かなる記憶を世に留めたるに非ずや。彼の人心人情に根さし來る、一大常識は、千載の教文たり。然れども吾人は其の教文よりも、寧ろ彼の品性を愛慕追攀する能はざる也。彼は革新者にあらず、况んや革命者をや。彼は獨闢の宗師にあらず、彼は折衷家也。彼は最も風潮に敵するを欲せざる也、彼は風潮を導て之を少なくとも正善の域に達せんと欲したり。故に彼は決して固陋にあらず、彼の固陋ならざるは、尙ほ彼の殺急ならざるか如し。彼は實に正義と智慧とを兩立せしめ得るとを宣言し、而して之を實行せり。

彼は或る意味にては、高尚なる臨機應變者なり。所謂「時中」の二字、之を説明して餘蘊なし。吾人は論語を讀む毎に、實に眼前髣髴として、一個の温良恭儉讓なる標式的紳士を活現せすんはあらず。

元田東野翁の死するや、聖主は之が爲に宸襟を惱まし給へり。其の親朋故舊は、之が爲に啼泣せり。其の晩年の一知己たる勝海舟翁の如きは、殆ど余も亦幽界の遠旅に同行するも知る可からずと嘆息せり。而して其葬むらるゝや、儀仗兵臨めり、總理大臣臨めり、他の國務大臣臨めり。然れども我日本の社會は、未だ曾て少しも感動せざるなり。新聞紙は翁の死去を記せり、其の男爵に叙せられたるを記せり、其葬儀を記せり。然れども之を記するや、所謂只一個の樞密顧問官として記せしなり。極めて淡泊に、極めて冷淡に。

吾人は毫も之を異しまざるなり、何となれば翁の如きは、赫々の功無

く、明々の名無し。彼の新島襄先生の死去よりも、寧ろ中村福助氏の病氣に痛痒を感じずる社會にして、彼の板垣伯の脱黨事件よりも、彌生館の壯士の亂暴をば、特筆大書する新聞紙にして、斯の如き事ある固より異しむに足らず。但だ吾人に於ては聊か其趨を殊にせざる可からざる者あり。何となれば元田翁か此世を去りたるは、實に我邦に於て最も進歩せる儒教的思想の代表者を失ひたる事實にして、亦以て我邦思想變遷の年來記に印象を遺す可き價值あるを信ずればなり。豈に之に止らんや、我邦は實に温良忠摯、寛和にして禮文ある儒教的老先生を喪ふたるなり。

翁は文政元年一月肥後熊本に生る。恰かも是れ、徳川時代後殿の大文學家頼襄か九州を遊歴して、熊本に抵り「银杏樹高識」故國」と歌ひたる當時にてありし。翁は實に中士以上の家に生れ、最も整頓せる封建社會

の中に成長せり。翁は其の統系よりすれば、維新革命前紀の人に屬す。故に其中年以後維新の變動に遭遇したるも、血氣既に定りたるの時にして、其從來の信仰を頹蕩の中に漂し去るか如きとあらざりし也。晩年明治四年五月—明治二十四年一月—聖天子の知遇を辱ふし、宮禁に出入する二十年。終に明治朝廷第一の耆老を以て、光寵と慰樂とを擔て此世を去る。世間風波多しと雖も、而して特に翁が經歷したる年代は、最も迅風猛浪の高頂なりしも、翁は閒々然として世に出て、平々然として世を去れり、翁も亦多福の人なりと云ふ可し。且つ翁が少小より其の先輩横井小楠、長岡是容の諸君と講習したるは、君を堯舜に致すの術なりき。而して豈に料らんや、其の先輩或は轍軻にして死し、或は兇豎の毒刃に斃れ、空しく胸間に蟠屈する大經綸を懷て、九原に赴きたるに。獨り翁は君側に侍する二十年、其の壯歲學

君を堯舜に致すの志

元田翁を知らずる可からざるか

ふ所を以て、之を事實に施すの好機會を占有せり。翁は果して其の志を達するの、力を有したるか、果して其の志を達したるか。是れ吾人か卒爾に斷言する能はさる所なりと雖、其の志は確かに君を堯舜に致すに存したるや明なり、翁の忠純なる豈に其の志を欺くの人ならんや。翁か品性、志氣、趨向の大半は、横井小楠先生より陶鎔せられたりと云ふ可し。翁は實に自から小楠先生の朋友—寧ろ弟子として朋友なることを認めたり。翁曰く、

余年二十、初見先生、先生曰、爲學須通古今、明大義、開活見、施諸世務而已、若夫詩文、亦發於忠孝天性、彼拘々於章句者俗儒、不足與論也、先生時年二十九、余以師兄事之、而先生待余以心友、

惟ふに小楠先生も亦た明に之を認めたるならん。一部の小楠遺稿之を證するに餘りありとす。

故に苟も翁か本領を知らんと欲せば、先づ小楠先生の本領に遡りて、其の淵源を探らざるを得ず。

聖門傳授の心法

梁川星巖翁、嘗て小楠先生を評して曰く、彼は道學中の奸雄なりと。是れ大に誤れり。先生は奸雄に非ず、先生は實に聖門傳授の心法を以て、之を萬殊の人事に、適用せんと欲したる者なり。即ち其の聖門傳授の方法は、恰もコプラン氏か、自由貿易主義に於けるか如く、之を一家閨門の中より、天下廟廊の上に行はんと欲したるなり。先生曰く「心官唯是思、思則真理生」と。又曰く「果知君子學、總在格致功」と。即ち學問とは心の聰明を研くの謂にして、一心曇翳なければ、萬事立るに順應す可しと云ふに在り。是に到りて吾人をして殆んど先生亦た王陽明の徒にあらざるかを疑はしむるものなきにあらず。然れども先生は決して陽明の糟粕を嘗めて自から安んずるの人にあらず、况ん

一躍激 刺群儒 外儒

小補先 生の眼 中修治 齊家天 國平治 下更致 ないし

や宋儒の旨窠をや。固より先生も其の初年に於ては、管晏功利の學に迷ひ、更らに翻りて宋儒に求め、更らに變じて陽明に入り（吾人は更らに先生が陽明に私淑したるを公言したるを聞かず、唯だ其の遺稿中に痕跡の存するあるを認むるのみ）而して一躍激刺、群儒の園外に逸脱し、以て自家獨闢の乾坤を開拓したるを見る。先生の言を以て之れを説明すれば、曰く、「神知靈覺湧如泉、不用_ニ作為_一付_ニ自然_一」。

先生思想の歴史は概して此の如しと雖、其始終を貫きたるは、心法の一○事○な○り○。○修○身○、○齊○家○、○治○國○、○平○天○下○、○先○生○の○眼○中○に○於○て○、○更○ら○に○二○致○な○し○。○而○し○て○先○生○は○唐○虞○三○代○に○向○て○、○其○の○理○想○的○標○準○を○求○め○た○り○。○一○部○の○書○經○、○群○儒○の○眼○中○に○於○て○は○、○是○れ○唯○だ○古○典○の○み○、○彼○等○の○此○に○就○て○心○を○惱○す○は○、○其○の○古○文○今○文○の○真○偽○を○疑○ふ○に○過○き○ず○。○先○生○は○然○ら○ず○、○此○の○伏○生○壁○中○の○書○に○向○て○、○最○も○赫○焉○た○る○理○想○の○色○彩○を○加○へ○、○宛○然○た○る

三代の黄金時代を幻出し來り、其の堯舜を説く、信長秀吉を説くが如く、最も手近く、最も明快に。宛もアンゼロン、シドニーが舊約聖書を假りて、其の熱火の如き民政論を吐き出したるが如く、畢生の大領、活經綸は、實に此の中より拙て來れり。嗟呼古書、先生を助けたる乎。先生、古書を助けたる乎。

吾人は今茲に先生が春岳老公の爲めに作りたる、學校問答中よりして、先生の解釋を聞かん。

事新敷申事ながら天地の間唯是一理にて候得は人間の有用千差萬變無限候得共其歸宿は心の一ツにて候左れば此心を本として推て人に及し萬事の政に相成本末昧用彼是のかわりは候得共二ツに離れ候筋にては無之此二ツに離れざるが一本より萬殊に涉り萬殊より一本に歸し候道理にて候得ば政事と申せば直に修己に歸し修己は即政事に推し及し修己治人の一治に行われ候處は唯是れ學問にて有之候其故に三代の際道行はれ候時は君よりは臣を戒め臣よりは君を倣め君臣互に其非心を正し夫より萬事の政に推し及し朝廷の間欽哉戒哉念哉

古書 學校問 答

懋哉都俞吁咨の聲のみ有之候

又た先生が晩年の經綸を言ひ顯はしたる、「沼山閑居十首」中に、左の詩あり。

君臣尊卑殊、情則如^{ナリ}友朋、相信不^{シテ}相疑、未^ナ然互勸懲、盛哉^{ナレ}唐虞際、君臣道義親、滿廷^ニ呼^ビ佛聲、治化如^ニ日昇、

又た晩年の作にして、其の「讀^ニ二典^一」の詩中にも左の作あり。

如^シ聽^ク君臣呼^ビ佛聲、滿廷講^シ學見^ル眞情、叩^キ頭流^シ血果^シ何益、狂令^ニ賢材買^ハ直名、

亦た以て先生の本領を窺ふに足らん。

先生が政治上に於ける意見は、獨り是に止まらず、亦彼の天地位し萬物育るゝの道理をば、堯舜三代の治に演繹したるは、左の詩を以て證す可し。

鳥羽獸毛渾作^レ媒、四時定時百工閑、民庶不^レ識者^レ天業、只道帝功安在哉、

渾將^ニ人事^一付^ニ皇天^一、六府脩來又^レ蒲川、勿^レ道西洋明^ニ治術^一、四千年古既閑^レ先、

又た元田翁が、先生の語を筆記したる沼山閑話中にも左の言あり。

堯舜三代の心を用ゆるを見るに、其天を畏るゝ事、現在天帝の上^ニに在せる如く、目に視、耳に聽く、動搖周旋、總て天帝の命を受る如く、自然に敬畏なり、別に敬と云ふて、此心を持するに非ず、故に其物に及ぶも、現在天帝の命を受けて、天工を廣むるの心得にて、山川、草木、鳥獸、貨物に至るまで、格物の用を盡して、地を開き、野を經し、厚生利用、至らざるなし、水、火、木、金、土、穀各其功用を盡して、天地の土漏るゝと無し、是現在此天帝を敬し、現在此天工を亮る、經綸の大なる如之、宋儒治道を論するに、三代の經綸の如きを聞ず、其證には、近世西洋航海道開け、四海百貨、交通の日に至りて、經綸の道之を宋儒の說に徵するに、符合する所ある可きに、一とて是れ無きは、何なる故に乎、然るに堯舜三代に徵するに一に符合すると書に載る所の如し、堯舜をして當世に生せしめば、西洋の砲、艦、器械、百工の精、技術の功疾く其功用を盡して、當世を經綸し、天工を廣め玉ふと、西洋の及ぶ可に非ず、是れ堯舜三代の、畏天經國、宋儒の性命道德とは、意味自ら別なる所あるに似たり、張橫渠、西銘の合點は有れども、是も道理を推演して、合點を覺ゆるなり、治道事も封建をするの、井田を興すと云論あれども、是後世に廢れたる古

所志
趣大
神飛六
合中

法を、強て興さんとして、人情にも叶はず、却て益なかる可し、三代の如く、現在天工を亮くるの格物あらば、封建井田を興さずとも、別に利用厚生之道は水、火、木、金、土、穀の六府に就て、西洋に開けたる如き、百貨の道、疾く宋の世に開く可き道あるべきなり、時世古今の別あれば、今日の様には開け間布くも、其講究義述はいくらも、説話の残りある可けれども、是れ無きは、全く三代治道の格物と、宋儒の格物とは、意味合の至らざる處、有る可し、一草一木、皆有理、須格之とは、聞はたれども、是れも草木生殖を遂げて、民生の用を達する様の、格物とは思はれず、何にも理をつめて、見ての格物と聞はたり、大儒を批議するに非ず、後學のもの、徒に理學の説話にのみ奔りて、現在天人一擘の合點なければ、大源頭に狂ひありて、事實の上に於て、道を得ざる事多し、能々合點致す可き事なり。

是れ豈に先生中年の思想に向て、泰西的新思想を調合し、而して却て其の實例をば、其の平昔理想的世界たる、堯舜時代に求めたるものにあらざるなからんや。吾人は實に此の大規模ありてこそ、先生か、「帝生三萬物靈二使之亮三天功、所以志趣大、神飛六合中」と高歌したる

宛もメ
ラング
ソク
路暢
於けるに
が如し

の偶然ならざるを知る。而して元田翁の如きも、亦此の活見中に養はれたる人なり。翁が小楠先生に於ける、宛もメラングソクが路暢に於けるが如し。小楠先生は非常の人なり、氏は常人の最も圓滿に發達したる人なり。非常の人の缺點あると、常人の圓滿に發達したるとは、其差異に於て自ら一種の區別あり。則ち是れ共に同意見をを懷き、同時代に在るに係らず、小楠先生の一生は戰闘を以て始終し、翁か一生は平和を以て始終したる所以也。

翁が政治上に於ける意見は、未だ必ずしも翁が獨得の見と云ふ可からず、願ふに小楠先生の意見を紹きたるに相違なしと雖、亦た見る可きもの無きに非ず、吾人は其一斑を知らしめんが爲に、茲に翁が論語爲政篇首章の講義の一節を掲ぐ可し。

故に今孔子をして當世に生れ試に政を爲さしめたらば、夏の時を行ひ殷の轍に乗り、周の

冕を服し、樂は則詔舞するが如き、四代の禮樂のみかは、法律は佛蘭西、學藝は日耳曼、君主の國勢は露西亞、人民の自由は米國、海陸軍は英佛と云如く、今世は又今世に活用して宇内萬國の所長を採擇し其中を取て民に用ひ、天に先立て天に違はす、天に後れて天の時を奉し民智の度に順て、時世適宜の國憲民法を設立施行し、郁々乎たる文明の光華を宇内に輝かさんと疑を容れざる所なり、但彼英雄者流より之を見れば之を以て最上の政體治法と自得して文明國と誇るへけれども孔子は茲には猶足れりせずして曰、是政なり何る臧するに足らんやと、即ち心を正し身を脩め飽みて民を愛する赤子を保つか如きの誠心を開き、一夫も其所を得ざる者無きやうに公道を布き、造次も我心の仁を違らすして、此民の自由安樂に到らんとを求むるの外他事無かる可し、是れ孔子の政を爲すに徳を以てするの實驗にして、法に憑て法を行はず、政に任せて政を爲さず、一箇の徳を主本として、萬機の政を貫く、所謂一以貫之ものと同一理なり其至誠明教、千萬世を経るも雖五大洲を異にすも雖、得て易ふ可からざる者にて、古より政を爲すに徳を以てせし聖帝明王は其一世の民其徳に服する而已ならず千萬世の下猶之を思慕して止まざると、本朝にて神武天皇を始め奉り代々の烈祖の中にも、崇神帝、應神帝、仁徳帝、天智帝の如きは、格別聖徳を

以て政を爲し玉ひたるに、其法政は其代に循て沿革したりしと雖、其至善の聖徳は、千百年の今日に至る迄、人心に薰染して、欽慕尊仰忘るるも能はず是徳を以てし玉ひたるの明驗にして、孔子の言萬古不易と云へし、武臣政を執てより、大概武斷を以て、政を爲し歴代の政事となりたれども一二英傑の徳を以てせしと有る故、猶能一二世を維持するに足るを見れば、徳の世道人心に關する重く且大なりと云へし、辱くも當今御一新全く徳は神武天智の古に復らせ玉ひ政は萬國所長の新法を取らせ玉ふにて、復古維新の御政體眞に孔子の旨に符合し玉ふなり、然しなから法政の未に任するは易く、徳義の本を務むるは難きと故、將來の事、偏に聖徳の御勉強に在て、決して英雄者流に止まり玉はず、決して法政の未に任せ玉はず、益々至明の聖智を磨て、内外を照らし、益々至誠の天仁を垂て、應光を安んじ、益々至剛の神勇を振て大業を擔當し玉ひ、萬機の政、皆此中より發出し玉はんと、此章に就て孔子の旨を御體認致します所以なれば明治九年の今日、御講書の始に講述する微臣の愚衷なり、

翁は實に斯の如き思想を以て、陛下に事へたり。翁の宮禁に出入すると、二十年、未だ曾て一日も斯心を失ふと無かりしなり。翁が此間に

於て、幾何の勳功ありしや、吾人固より之を知るに由なし。然れども其聖明を禪補したるとの慙からざる事は、吾人固より之を信せんと欲す。

蓋し翁は萬事に就て、小補先生の意見を紹成したりと雖、亦翁が特種の品性無くんば非ず。小補先生は如何なる場合に於ても、師として立つ人なり。諸侯に對する時には、諸侯の師なり、帝王に對する時には、帝王の師なり、氣宇宙を呑み、眼千載に空し。其の至情眞摯忠實なりしと雖、神龍の得て狎る可らざるものありき。元田翁は然らず、その君臣相對するや(尊卑固より異なりと雖)決して朋友の關係に非ず、况や師弟の關係をや。翁は實に左の如く云へり、

君上を補佐するには先づ愛心を以て君心に洒ぎ愛心充溢して止まざるを覺ゆる時は自から君上の信用を得べし

愛心の厚薄を自省するには夢寢に徴して自ら知るべし愛心深き時は心す夢に君王を見るべし
宮女の君王を戀ふすら、なほ夢に君王を見る人臣として君に左右し其君を夢に見ざるは吾心の不忠なるを徴すべし此不忠なる薄情を以て豈問色を正くして盲を盡すとも豈君上の信用を得べけんや

是れ所謂翁が本領なり。是を以て知る、翁は良師に非ずして良臣なるを。此愛の一點こそ、惟ふに是れ翁が天性の然らしむる所にして、其の初年長岡是容氏の翁に與へたる感化の遺物にして、又た翁が晩年獨得の閱歷より得來りたる、工夫と云ふこそ最も穩當なる可し。それ唯斯の如く躬行實踐の工夫熟す、翁が聖天子の信用を得たる亦宜ならず哉。是に於てか吾人は、翁が進歩せる儒教的思想に隨喜するよりも、更に一層翁が品性を以て渴仰す可しと爲すなり。
翁は獨り小補先生の友弟たるのみならず、廣き意味よりも、狭き意味

よりも、實に孔子の門人と謂ふの誇言ならざるを覺ふ。孔子曰はすや言忠信行篤敬と。吾人は實に元田翁に於て其の活ける典型を見る。翁は自から其の長短を知れり、其の自述に曰く

余性柔軟之剛健氣象、唯無悖戾意思、是性之好處、六十年來所經歷、均以順得之。翁は實に自から欺かすと云ふ可し。一世思想の大潮流に鞭て奔るは、翁が能する所にあらず、危きを扶け傾くを起すの大鐵腕は翁が有する所にあらず。翁は徹頭徹尾調合的人なり。或る意味に於ては、保守、然れども頑固ならず。最も秩序を好む、甚た之を好む、然れども虚文、偽善、驕吝に陥らず。翁は實に一種の折衷家なり、從て又た應變者也。其の奮思想の中に成育せられて、明治二十四年に臻り、幽々の裡、君徳を補佐し、沈々の中、國政の得失を贊し、敢て精神上に於ける活ける死人とならざりしは、翁が謙虚益を求むに在りしか爲めなりと云へ、

亦た一は小楠先生講習の餘光にして、一は其の調合的精神に富み、坦懷物を容れたるか爲めにあらずして何ぞや。翁嘗て其の寫眞に題して曰く。

篤誠奉君。有盡無怨。忠純感國。闊然不見。寬和宜人。慈愛及物。不倚不流。毋固毋必。守常應變。順理中時。世有斯人。與爾同歸。

一個の元田東野翁、紙上に活躍せんとす、即ち其の靈性上の東野翁を活躍せんとす。吾人亦た何ぞ蛇足を添るを要せん。

民友氏曰く。翁の未だ召命に就かざるや、東野の精舎に於て學を講す、精舎は熊本城の東、託麻原の一角に在り、平蕪迢々、地勢逶迤として、東北より陵夷し來る、其の東北最高の嶺を阿蘇岳となす、其の勢嶄々然、劍鋌を半天に挿みたるか如く、烟烟直上、恰も敵を警する烽火臺の如し、亦た以て志士道を修むるの地に適す。童時余亦た書冊を挾み、

翁の門人に就て素讀を受く。記す家嚴余を拉して翁に謁せしむ、唯た見る廊を廻りて一靜室あり、帷を排して進めば、明窓淨几の下、一老先生端然として坐するあり、童子何ぞ知らん、唯た其靄然たる徳容夢の如く、余か記憶に微痕を存するものあり。明治二十二年小楠遺稿編纂の擧あるや、偶ま翁の手書を辱くす、余答て曰く、今や耆宿相踵で凋謝す、而して聊か意を強ふするは先生の在るが爲なり、願くは先生の庭に趨りて先哲の遺教を拜せんと。而して遂に果さゞりしなり。余が大江の草舎に在るや、翁の舊廬を隔つる、僅に數百歩、楓竹鬱然、小渠其間を繞る、余其傍を過る毎に、未だ嘗て祇徊せずんば非ず。今や則ち亡矣、亦た哀む可き哉。



板垣伯に與ふるの書

板垣伯閣下。眼底もし涙あらば、余は閣下の爲に一滴を濺ぐを愛ます。閣下は維新の元勳なり、其功業は、南洲、大久保、松菊の諸巨人に比す可きに非ずと雖、抑亦た現世に時めき、榮耀榮華を極め玉ふ諸元勳に比して、敢て毫末も劣る所あるを見ず。而して閣下獨り、落々として遇ふところ無く、窮時と伴ひ來り、貧年と追ひ臻る、獨り其の心事の老書生を以て自ら處るのみならず、其の身世亦た實に老書生なりとす。閣下自ら是に處して悔ひざるも、試に閣下の境遇を以て、之を彼の千金美人を買ひ、萬金別墅を買ひ、人間の慾願遂げ盡して、今は唯た長生不死の靈藥を得ざるを以て憾とする元勳諸公に比し、閣下が此の如きを思ひ、而して何故に是に到りたるを思ひ、縦し幾分か閣下を